改教時報

第百參號

明治三十一年十二月廿六日遞信省第三種郵便物認可
明治三十六年八月八日發行　（每月一回八日發行）

政教時報第百參號目次

論説　《社説》

◎清澤滿之師及其信念　法學士野田藤馬
▲予が信仰

◎教導難　文學士紀平正美

溫知

◎龍樹菩薩烏陀愆那王に與ふる書　文學博士松本文三郎

社會

◎勞働組合の利害　池山榮吉

信界

◎信心爲本　文學士雛村生

◎人生の弱點　百目木劍虹

雜錄

◎村上博士の原理論に於ける形式を評す　本多文雄

◎故藤村操君の手簡　南木性海
▲原稿遺失の記　一記者

文苑

◎夏季雜咏　句佛

◎同　上　白山

◎廢寺の賦　露生

報道

◎報道一束

◎東北傳道　《政教子》
▲新刊紹介　近角旭村

挿畫

◎清澤滿之先生の肖像

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。

二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合により國民の一致を堅固にし國家の隆盛を企圖する事。

三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。

四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。

五、公認教制度を調査する事。

六、社會問題を講究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。

七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。

八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。

九、教會の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。

十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。

十一、殖民傳道を奬勵する事。

十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光發せしむる策を講する事。

政教時報　第百三號　八月八日發行

清澤滿之師及其信念

吾人が敬愛師事せし清澤先生は逝き玉へり。溫乎たる音容、森嚴なる風姿亦見るへからず、靈壇に跪きて倩々先生在世の昔を懷ふ。冥想靜觀の間、洋々として先生の偉靈に交り、歷々として先生の德音に接す。爐畔に圍欒して破顏微笑信仰の事を說かるゝや、春風面を拂ふて清香衣に薰ず。演壇に兀立して、咳唾厲聲的の實驗を披かるゝや、秋曉霜に呵して山嶽爲めに震ふの概あり。外柔にして內剛に、自ら待つ嚴にして人を待つ寬也。先生の如き實に近代の偉人、

吾人の生きて再ひ見るべからざるの人惜哉今や親しく敎を受くるに由なく、知友門人空しく涙を寒山新墓の下に灑く。人の山中に在るや、其山の面目を知る能はず、山を去る遠きに隨て、初めて其眞相を看、如何に自餘の群山に傑出せるかを望見する

とを得べし。人亦然り、其世に在るや之に接する者、單に其一端を知るのみ、一たび逝きて、回顧追想各其面目を描くに及びて或は繪となり、或は畧となり、概括して初めて眞個に廬山の實體を知ることを得べし。先生の如き其方面によりて確かに其見る所を異にするの一人也。此に於て益々其人格の偉大なりしを想ひ、其蘊蓄の深邃なりしを感ず。嗚呼今や歴史は確かに新たなる光輝を加へたり。靈界は一個の英魂を迎へたり。吾人は茲に先生を追悼して、歴史上の偉人として世の未だ先生を知らざりし人に向て、其人格と信念とを紹介せむと欲する所也。

清澤師を知らむと欲せば、師か強硬なる意志の人たることを知らざるへからず。吾人之を師の親友澤柳政太郎氏に聞く。師の大學に在るや好て人と論議す、論理明晰屈すべからず、人遂に師に窘むるに腕力を以てす。師身小にして力亦弱し、然れ共其苦痛を忍びて決して自ら屈せず、師をして苦むるもの却て閉口するに至りしといふ。以て師か天性を知ることを得べし。蓋し師の如きは實に精神の各部圓滿に發達せしの人、明徹玲瓏たる智力、慈愛溢るゝが如き感情、何れも吾人の敬服感佩する所たりと雖、師か全身を貫ける強固なる意志を知らずむば、其智力其感情の價値をも知る能はず、師は實に意志の人、寧ろ意志の權化と云ふも過言にあらざるが如し。意志ありて初めて清澤師あり、師か意志を知らずんば、師か苦痛を知る能はず、師か苦痛を知らずんば、師か信念を知る能はず、師か信念を知らずんば、師か苦痛を知る能はず。師は此意志あるか爲に生き、此意志あるか爲めに信仰に病み、此意志あるか爲めに働き、此意志あるか爲めに信仰を得遂に此意志の爲めに命を奪はるゝに至れり。實に師か一生は意志の歴史也。師此意志を以て學問と戰へり、此意志を以て宗門教育と戰へり、此意志を以て其一族の爲めに戰へり、此意志を以て、求道實行の爲めに戰へり、此意志を以て病魔と戰へり、此意志を以て友情と戰へり、此意志を以て主義政と戰へり、此意志を以て理想と戰へり、此意志を以て倫理と戰へり、此意志を以て知己の爲めに戰へり、此意志を以て學生の爲めに戰へり、此意志を以て新法主の爲めに戰へり、此意志を以て信念の爲めに戰へり。嗚呼師は實に此の如く巖石に衝突し鐵板を貫き、雨を嘲り、風を笑ひ、鍛錬陶冶の後個中に偉大の光明を認めたるもの、是れ師か晩年の信念に非ずや。實に師か信念は師か實驗の結晶也、師か苦辛の成産也。故に師か信念を理解せむと欲せば、師か衝突苦闘せし人生の行路を遡りし巖石を知るを要す。其巖石か如何に師か行路に對して苦痛を與へしかを知らむと欲せば、師か直狀徑行なる意志的人格たることを了解せざるべからず。師は自ら操守する所は死を以て爭ふの性質也、而して時としては其家族の爲めに己を捨て、其言ふ所に從ふ、吾人此に於て師か慈愛の大なるに感ずる者也。

師は自ら志す所猛然として進み、一寸と雖之を枉ぐるは身を削るの感ありし也。而して時としては友情の爲めに己をすてゝ其の爲す所に從ふ、吾人は此に於て其友情の厚きに泣く者也。師は最も條理を重んじ、去就を尊び、行くに法あり、止るに則あり、清廉は師か天性にして嚴格は師か本來の面目也。而して時として其學生の爲めに謀り、宗門の爲に謀り、新法臺の大命あるに及びては、殆むど人生の羈絆を脱して水火の難に赴き、身を俎上の牲に供ふ。是吾人か泣かざらむと欲して、泣かざる能はざる所、此に於てや師か眞個の理性を認むべく、師か眞個の慈愛を認むべく、而して師か眞個の意志を認むべし。かくて師か人格は初めて髣髴として其の全體を伺ふべし。師か始を知るものは、師を以て森嚴激厲なる苦行家と爲さむ。師か中年を知るものは、師を以て純潔なる理想を追ふの哲學者と爲さむ。師か晩年を知るものは、師を以て內觀主義、主觀主義、無主義主義の靈的救濟者となさむ。然り確かに各是れ師の一面なり、然れども、如何にして此三方面か渾然として一身に於て、圓滿に調和し、一生の經歴として如何に推移せしかに至りて、是實に師か眞價の顯はるゝ所、是師か德器の尋常ならざりし所、師か最も苦心せし所にして、且つ師か信念を獲得するに至りし秘鍵也。吾人今や師か一代の實驗を味はむと欲するもの、單に師を追懐するの情のみならず、師か一生は即ち是れ生ける德音にして、師か行路は是れ信念の實現也。而して是即後進に對する實地の先導に外ならざるを以て也。

師か此苦闘の歴史は確かに三期に區別するを得べし。第一期は師か明治二十一年九月京都に入り、宗門教育の經營に身を委ねられしより、次て嚴格なる求道の實驗を經、廿七年病を舞子に養はれし時代也。第二期は二十九年十月改革運動の一黙火を初めとして、三十一年四月『教界時言』の廢刊に至るの時代也。第三期は三十二年春、新法臺の東京在住に隨喜して東京に出でられしより。昨年同法臺の西歸と前後して故山に歸臥し、而して其間屢西京に出て、宗門の前途に就て心を碎き、書を以て猶諄々人を誨て飽まで倦まざりし時代也。

第一期

師の大學に在るや、頭腦透徹哲學者として非凡の材たりしこと衆の知る所。師か東京を辭して京都に入る、是既に師か抑々己を損てたるの始也　師か宗門教育を肇むるや、言はずして行ひ、無爲にして化す、實に身を以て人を率ゐし者也。當時、師、洋裝にして長髮たりき、一日演說會あり、某氏切りに辯を弄して暗に師か僧儀に反せるを諷刺す。師これに續きて演說して曰く、人誰か如何なる感想を懐抱するや知るべからず、今日此の如きの我、明日亦如何に趣を異にするかを知るへからずと、辭色共に厲し。聽く者師か何を意味するかを

知らず、然れとも眞摯の氣眉宇の間に髣髴たるに感せざる者なかりき。果せる哉、久しからずして師が切實なる求道的時代は肇められたり、忽ち顧を圖にして、衣廉を用ひ、食に肉を用ゐず、往くに車なし。殊に叡山の麓なる窟に籠れる行者を訪ひ、道を訪ふに到る。實に是れ苦行林中の釋尊、遂に火食を廢し、妻子を遠け、曉に霜を履みて本山に詣す、不眞面目なる六條の天地皆襟を正くす。師此の如くして敎鞭を取る亦固の如し、未た嘗て一日も廢せず、師の肺病を得たる實に此時にあり。然れども師毫も屈せず、勉めて校に上る、血瀝口角を染むるに至る、猶知らざるもの〻如し。當時師が親友澤柳政太郎氏を聘して、宗門敎學の顧問となし、亦親友稻葉、今川兩師を招き、又井上豐忠師と相見ゑ、親交あり。一日此等の友人相會して師を擁して、師に迫るに休養の事を以てす師頗る懌ばざるの色あり、之を稻葉師に聞く、其苦きこと歷々今猶見るが如しと。嗚呼實に此直進徑行的の行爲は是師か本領也。蓋し師が心中遂に職に斃るゝの決心たりしならむ。而して友人說くに法の爲めに其意志を屈くべきことを以てす、尋常人を以て推す、師の苦を知るべからず。然れども師か既に屬行せし所を以て當時の心中を推す、洵に察するに堪へたり。師斷然として答へて曰く、今後一に諸君の言に從はむと、其後忽にして身衰へ体羸る、是師が友情に感激して、自己の意志を捨てたるの所、絕對他力の信仰は正に此時に胚胎せり。予後日信仰談話會を開き、親しく師の實驗を聞く、師苦行時代の事を語り終りて曰、遂に失敗に終りたりと、嗚呼此失敗正さに是れ他力信仰關門の開ける時にあらずや。絕對の光明は其深奥の中より初めて人生の上に映射し來りたるにあらずや。舞子が濱に於ける師が病を養ひし時は師か心中に於ける偉大なる或物を養ひたりし時にあらずや。須磨の月、淡路が島、師が胸中の天地を描き、松吹く風、岸拍つ波、師をして夫の天命を樂ましむ。此の如くにして激厲なる苦行家は一變して、從容なる樂天家となれり。此に於てや師はもはや淸澤の淸澤にあらずして、友人に捧けられたる淸澤也。生殺與奪は一に友人の意志にあり、我を生すものも友人なり、我を殺すものも友人也。他力慈愛の光明は實に友人の手を通じて、師が胸中を照されたり、昨年稻葉師予に語りて曰く初めて「信ずるは力也」の德音を一讀したるの時、語々胸に徹せりと暗涙頤に交る、信する者、苟も信せられたる者、嗚呼共に與に大悲の光明に泣かざるべからざる也。

第二期

師既に病の爲めに一身を捐つるの決心をなせり、而して劃切なる友人の忠告に支へられて一生を萬死の間に得たり。是等の友人は己に代りて宗門敎育の事を經營す、拮据其職を盡くす。然るに當時宗政の局に當るもの其計畫を破壞し殆と九

仞の功を一簣に欠かんとす、於是乎、宗門の前途頗る暗澹として危機日に迫る。師乃ち私かに以爲らく、吾曩に友人の爲めに一命を拾はる。請ふ病餘の身を捐て〻一は宗門の弊竇を一掃し、一は友人の知己に酬ゆることを得んと、乃ち斷然として起つて改革を主張し、天下に檄して同志の士を糾合す、實に白川黨の崛起即ち是なり。當時公憤激越にして義氣凜烈たること宗敎界に稀に見る所氣風大に振作す。是れ皆師が獻身的行動に感奮して起れるもの、如何に其感化力の偉大なりしかを想見することを得べし。吾人此運動に於て最も感嘆に耐ゑざる所は、首唱者をはしめとして學生及有志何れも統一ある運動をなしたる點にありとす。抑師の特性は自ら用ゐるの資にあらず、自ら其の身を捐て〻他の用ゐる所に放任するにあり。於是乎、大は益々大にして而も毫も統一を欠くことなし。當時の事已に天下の知る所、吾人は特に之を細說するの要を見ず、唯其特長を擧け來らば其運動の最も理想としたる點にあり。己に其目的とする所、理想的の宗政にあり、而して之に進むに理想的の手段を以てす。即ち其主張する所、又其施設する所、悉くこれ理想的にして容易に之を眼前に實現し得べきにあらず。其議論稍もすれば抽象的にして、實際施設の點に適切ならざることあり。世人以て其空論の爲すなきを議したるものありき。蓋し理想なるものは之を追ふべし之を捕ふべからず、若し現實一步進むときは理想亦一步進むものなり。理想は其捕ふべからざる點に於てはしめて眞價を見るべし、理想益々進むに從つて益々現實の境を去る。是を以て之を觀るに、當時議論の空論に涉りし所以のものは、偶々師が精神の高潔なるを暗示するものたらずんばあらず。若しそれ成功を急き結果を一時に收めんとするか如きことあらむか、必ずや一種の宗政的動搖として小結果を收め終りしに過きざる也。

師は斯の如く宗政其者に對し自ら之に當らむとするが如きは極めて淡泊たりしと雖、獨り敎育の點にいたりては日夜其念頭を去らざる所。師當時動搖せる大中學の學生に對して、其前後の策を講ぜんとして苦心頗る慘澹たるものありき。一日當局者毫も全國信徒の請願する所を容れず、改革の前途茫々として頗る望洋の嘆ありき、師は首を鳩めて最後の手段を議す。乃ち斷然として主張するものあり、曰く、須く東京に大學を設立し以て精神的の敎育を施し、師弟共に實踐躬行身を率ゐ、互に信念を磨き、以て宗門百世の謀をなさばこれ最も確實なる方法なり。其校舍の經營日課の設目の如きは必ずしも其全きを求めずして可なりと。師一言の下忽に贊成の意を表し、翌日直に公開の席上に於て之を發表す、實に眞宗大學東京移轉の紀念なり。而して此主張は當局者の最も恐るゝ所となり、請願の事果して用ゐらる、以て師が其志す所に向て猛進するの勇氣を想ふべき也。然りと雖も宗政改革に於て現實

的の結果を收めざりしは、師に取りては大なる教訓たりしなり。現實は悉く理想に背反し、社會は悉く精神と違ふ。於是乎、師再び物質的現代の期すべからざるを悟了して忽ち精神的靈界の光明を仰ぐ。師乃ち鄕里大濱にありて靜に精神の修養を事とす、この時に當りて一小俗事あり、師必すしも己が主張するか如き理想を實現すべからざるの場合にあふ。師乃ち自己の意志の貫徹すべからざるを了し、翻然として悟りて曰く、天下何物か言行必ず一致すと云ふべけんやと、人間必すしも其期する所亦何ぞ實行すと云はんや。於是乎、師は一躍人生の羈絆を超脱して絶對他力の大命に從て其行藏を決するに至れり。是にいたりて師が信念は益々高くして愈々捕捉すべからざるに至りぬ。

一日師予に語りて曰く、予今や、予が意思を貫徹することを斷言するの資格なしと。嗚呼是師が自我の小範圍を脱落して、絶對他力の大範圍に悟入せる大實驗にあらずや。果然師は當時陰雲深く鎖して暗澹たる宗門の前途遂に一道の光明を發見するに至れり。まさにこれ師が晩年に於ける最も光輝ある時代を開闢し來る。

第三期

師事を處するや、必す議論の之に伴はさることなく、條理の井然として整はさることなし、其出處進退の如きに至りては、最も清廉潔白にして一點一畫と雖、決して容易に手を下すあることなし、而して師が大事を決斷するに當りてや、殆むと直觀的にして一點の理窟なく、一たび感激して動くに及んでや、猛然として水火の難に赴く。明治三十一年新法主東京在住の事あり。師鄕に在り、之を聞き、大に感じ、直ちに演說會を開き以て宗門の曙光東天に輝くものとなし、公衆に向て其赤心を披瀝す。吾人は師か其一たび信する所に向て直進勇邁斷して言ひ、斷して行ひ、毫も一髮の餘裕の存せざる所、實に是れ天賦の宗教家也。遂に三十二年感激隨喜して自ら東京に住居せらる。是實に宗門危急の時、自ら晏然として高臥すべからざるを察し、以爲らく、嗚呼我病餘の身を以て友人に許せり、今や我改革殘餘の身を以て之を新法臺の下に捧げむと、是師が晩年の精神也。當時師本鄕森川の僑居にあり、明窓淨几青年の薫陶に勉め、就て教を請ふものに懇切に指導を與ふ。私かに宗門の消長を察し、心を潛めて心靈の修養を事とす。師か當時の心事を知るもの誰か師が爲法の赤心に泣かざるものあらむ。果然局面は開かれたり。實に師が新法臺に隨て一身を東京に移せしはやがて是れ大學を東京に移さるべき端緒也。宗政の一角に新生面を開きたる先驅也。浩々洞の名の下に今の求道學舍家屋に住せらるゝに及びて、翁然として四方道を求むるの青年集り來る。而して日曜毎に精神講話を開きて、多年實驗の結果を披かる、實に是れ日曜講

話の前身也。殊に精神主義を主張して、現代滔々たる物質的風潮に反抗し、力を極めて信念の切勵を鼓吹す、洵に東都教界に信仰の新光明を開きたる師の場也。蓋し師は飽まで逆流的人物也。苦闘的人格也。人、宗教の科學的說明を講究すれば師斷して科學の宗教に對する無効を主張す。人、繁瑣なる哲學を講究すれば、師斷じて哲學の宗教に對する無能を罵る。人、社會事業を主張すれば師斷して社會事業の宗教の本旨にあらざるを公言す。人、倫理を主張すれば師忽ち倫理已上の宗教を說く。師は實に激藥也。清凉劑也。師色を厲まして死の問題を說く、人をして心を寒からしむるものあり。師の言論時として人の誤解を招くことあり、師亦其信ずる所極端に之れを主張し人をして喫驚口を噤せしむるに至る。然れども師の主張は皆師の實驗也、一言一句皆生命あり。若し之を學ぶものにして、徒らに師が形式を墨守して、所謂其精神なるものを沒了するに至らば、師が生ける德音を味はざるもの、深く戒めざるべけむや。吾人の理解する所によるに精神主義なるものは、師が實驗の結晶也、師が心血の凝固也。嘗むべし、飲むべからず、味ふべし、食ふべからず、見よ。師が如き意思の强硬なる人にして、人世の風濤と戰ひ、初めて其局限を感知し、絶對の光明に接觸するに及び、所謂如來の大命は實に意味深き德音にあらずや。師が如き高潔なる理想を抱ける人にして、其理想を實現せんと欲し終に其理想の實現すべからざるを悟了し、初めて吾人精神上に於てのみ滿足を發見し、靈的に佛陀の光明に交り、遂に人生を美化し來りたる時に於て、所謂內省主觀の主義は實に人世最後の安所にあらずや。師が如き嚴格なる實行家は自ら一擧一動必す則あり、一言一行必す規あり。而して師は實に之を厲行せしの人にあらずや、師は死を以て之を守りたるの人にあらずや。而して人生必すしも是等理想の法則の下に動き得る者にあらず、師が清潔嚴正なる天性は其行の進むに從ひて、其理想的道德の標準は益々高められたり、遂に斷乎として人生倫理の羈絆を脫落せざるへからざるに至る。此に於てや、師が所謂倫理已上の宗教は實に偉大なる教訓にあらずや。ルーテルが手を洗へは益々汚ると嘆きし所。親鸞聖人か無戒名字の比丘を公言されし所。吾人は師か倫理已上の宗教を主張せられたるの點に於て、佛陀無限の大悲を味ひ、永久の救濟を實現せられたると同時に、一方には、如何に師か森嚴激厲なる實行家たることを反面にあらはし來りたるに感せずむはあらざる也。

師が平素愛讀卷を捨てざりしの書三あり、一は阿含經、二はエピクテータス、三は嘆異鈔也。師は天性質撲の人、美食を好まず、美衣を嫌ひ、文學詩歌音樂等世の所謂優美なる分子に向ては先天的嗜好を有せず。師は實に生れ乍らにして阿含經中の人也。蓬髮垢面の一沙門は寧ろ師の眞面目也。師一たび苦行を廢してより、法衣必しも絹を辭せず、食亦必しも

肉を禁せずと雖、自ら持すること頗る薄し。師が窮屈なる規律的生活を廢してより益々師が眞個の精神的生活の眞面目をあらはし來りたるものゝ如し。無戒中の戒、力行以て人を師ねること蓋し師の知きは近世再び見るべからざる事實也。而して自ら遇する此の如く薄きにも拘らず、人を遇すること頗る厚く、自ら待つ此の如く嚴なるも、人を待つ洵に寛也。師屢々阿舍を繙きつゝ三衣一鉢衆弟子に圍繞せられ、安舒として食を市に乞ひ玉へる釋尊の風丰に私淑せられしを想見せずむばあらざる也。師固と士家に生る、自ら凜乎として武士道的感化を享くるものゝ如し、教界稀に見る所の資也。殊に克己自制の精神の激烈なる師の特徴也、宜なる哉、師はストイック的氣風を好み、意志的實行を尊ぶ。特に物質的快樂を退けて精神的安慰の隱れ家を見出したる點に於て、彼のエピクテータスが一奴隷の身として從容として天地の間に遊び、天下の富、帝王の尊、猶其樂を易ふ可からざるの精神に感ぜり。

一日師語りて曰く、予が如き病軀四方雜然として苦悶の纏綿し來り、葛藤殆むど解けざるに及びてや、エピクテータスの利劍を揮ふて之を切り開くに非ざれば、殆むど活路を發見する能はずと。以て如何に師がエピクテータスを心讀體讀したりしかを知るに足らむか。若し夫れ嘆巽鈔に至りては實に是れ師が絶對他力の信仰を感受したるの樞機、從容安心の樂境を開示せられたるの秘鍵也。嗚呼師は苦しむべく生れられたり、人生を實驗すべく生れられたり。昨年一日師予に語りて曰く、今年は破壞年也。曩きに宗政は破壞せり、我長子は破壞せり、我妻は破壞せり、而して今や學校は破壞せり、我亦久しからずして破壞せんかと。而して猶師を苦しむるに先づ第二女を破壞して破壞は遂に師に迫る。人世若し慘澹たる歴史を求めなば師の如き亦其比を見ざるべし。而して師は毫も之が爲めに苦まざる也。師は實に人世に於ける運命を知れり、人生に於ける價値を知れり、實に生を知れり、病を知れり、死を知れり、嗚呼人生は實に此の如きものたるを知れり。人生は此の如きものたるを知ると共に、佛陀無限の救濟は師が胸中に輝けり、佛陀無限の光明は師が全身を攝取せり。生くるも、死するも佛陀の御計也、善かれ、惡かれ如來の御思召也と云ふもの是實に師か救濟の光明を見出したる一大樂地にあらずや。死生命あり、富貴天にありと云ふことがある此命と天とが我信ずる如來の本體である」と云ふもの、實に師か最後の遺訓にあらずや。嗚呼此に至りて吾人亦何等の蛇足を加へむ。嗚呼清澤先生は是れ生ける信念也。嗚呼如來大命の權化也。此信念や天地碎くる時あるも動くべからず、此大命や世界破壞する時あるも千古常住にして歴々として其德音に接することを得べき也。實に是れ吾人永久の光明にして、又悠久なる生命の源泉と謂つべき也。

回顧せは本年二月師が京都に出てられたるは、師が宗門の

爲めに盡されたる最後也。稲葉師語りて曰く、實に師は事を始め而して克く終を全ふし、結束を附くるの人なりしと。洵に然り。二月二十五日師將に京を辭せむとし新法臺に謁し、謹んで別を告げて曰く、恐くは不肖滿之臺下の眷顧に報ひ奉るの最終ならむと。歸來稲葉師に語り、從容として頗る心を安んずるの色あり。此日早朝乘杉氏の誘ふに任せて予、清澤師稲葉師と共に撮影す、實に是れ先生最後の肖像也。此に掲くる者即ち是也。同日午後予、大谷の祖廟に詣し、再び先生を稲葉師の寓に訪ふ。身神安舒として容姿崇高なり、言を悉くして宗門の爲めに語り、意密にして慈愛の情面に溢る。風丰歴々として猶見るが如し今にして之を懷ふ、嗚呼是れ實に先生最後の示教たりし也。今や社會は暗澹として黑雲を以て蔽はれたり。然れども先生の實驗されたる信仰は實に曉天の明星也。今や教界は風濤險惡にして人皆適歸する所に迷ふ。然れども先生の遺されたる精神は岸上の燈明臺也。頭を回せは一片北邙の煙は遠く先生の音容を隔つと雖、其精神的光明は益々輝きて長へに現代の混濁を救ふ。古の所謂仰けば彌々高く、鑽れは彌々堅きもの實に先生に於て之を見る。吾人聊か先生の人格と信念とを紹介して、世の未だ先生を知らざりし人に告くと云爾。

明治三十六年六月二十五日、仙臺第二高等學校道交會の催せる五城館に於ける、先生追悼演說會にて披瀝せし所也。爾來東北傳道の爲寧日なく、遂に先生月忌の夜に當りて、羽前國尾花澤捲雪樓上月影凄凉たる時、筆を採りて一氣呵成文字を作る。稿、東京に着して不幸にして遺失す。北越傳道中其飛報に接し、再ひ筆を驅りて稿を起す。然れども日夜勿忙遂に先生盡七日後五日、三河國蒲郡健碧館に於て之を草し了る。

近角常觀識

越後國府懷古

樂夫天命復奚疑。
從容只須仰大悲。
青山青水長沙白。
行吟澤畔風吹髭。
回憶聖人謫居日。
長安萬里別妻兒。

（於奚疑館　旭村）

予が信仰

今突然此追悼會に臨んで清澤先生の靈魂に向つて告白する處がある、僕は清澤先生の名を今迄知らぬ者であつた、否前半生の清澤先生を知つて居るが、後半生の清澤先生は知らぬのであつた、昨夜前半生に於ける清澤先生と後半生に於ける清澤先生が實質に於いて同じき事を初めて知つたのであつた▲昔話にはなるが高等中學校在學中德永と云ふ先生があつて佛國史の教授をされた事は確かに覺ひて居る、其嚴正なる態度と强情らしき容貌は宛として今にも目に殘つて居る、此德永先生の後半生が豈圖らんや、此頃逝去された清澤先生であるとは近角學士より昨夜初めて聞いた處だ、是が先生の追悼會に出席した一の理由である▲夫から昨年教科書事件の湧起した際嫌疑者として僕は拘引された……此收監中の事である、僕は境遇よりして將た立場よりして、理窟以外に何者をも認めぬのであつた、信仰の念も何もないのであつた、其僕が拘引されて收監された、全く寝耳に水の意外なる事件であつたのだ、收監中の僕はどうであつたらう、不平、懊惱、煩悶、苦痛見る者聞く者万感錯綜して辨明しない、見舞の人々なども日增憔悴して行く僕を見て非常に心配して呉れた、自分でも亦晴天白日の時を待たねばならぬ事を自覺した、夫迄は自ら身を害ふ樣な事があつてはならぬ事をも自覺した、さりながら依然として煩悶は煩悶であるサテ考ひて見ると國家は無限大の權力を有してる者で、個人は此前に立つて頗る弱い者である、頗る微小なる者である、打てど叩けど國家なる大磐石は音もなく手答ひもない、茲に至りては不平の聲の洩し樣もなく、七顚八倒何の甲斐なき事を自覺した、自覺して弱い者微小なる者と自分で諦めた、諦めたのは即ち無限の不平煩悶が鬱積した結果である、此時に際し近角氏より「信仰の餘瀝」を寄送して呉れた、讀むとはなしに讀むで見ると、鬱積した總べての情緒が針で引き出される樣である、能くもコウ自分の意中を云つて呉れたと感嘆しながら、三讀四讀僕は既に彿陀の光明に浴して居る、此後裁判の折などにも、人間の法律道德などが頗る不完全なのを見ると同時に、信仰の念を起した▲斯の如く物質以外理窟以外に何者をも認めなかつた僕が、初めて信仰の念を起した、是德永先生の後半生なる一代の先覺者清澤滿之先生の追悼會に臨み、敢て其靈魂に向て告白する次第である。

仙臺市五城館清澤師追悼會に於て

宮城縣視學官　野田藤馬

教導難

紀平正美

下。

第一の方面は重に政治的の意味に於て顯はれて居る、即ち指導の位置に立つものに大なる權力が與へられて居る事實である、此の方法は昔の堯舜時代の如く諸般の事が單純で治者と被治者との間に十分世界の分化もなく、只治者の能力が秀てゝ被治者が殆んど無我の樣な本能にあつた時ならば、尤もよき手段でもあつたであろう、併し漸次被治者にも自分の世界が確立し、我と云ふ者が定まると中々六ヶ敷く且つ複雜になつて來る、則ち我が立てば自然何故我は治者に從ふべきかと云ふ反省の念が起り、其の結果治者の權力を奪ふと云ふ樣な事になる、是の事實は政治史を見れば分明のものである、勿論治者の方で此の權力を各被治者の共通世界範圍に止め置いて、即ち濫用と云ふ事のない限りに於ては勿論此の爭即ち兩世界の衝突は起らない、併し嚴密に此の範圍に限られて居る間は自然人を教導して行くと云ふ積極的方面に進むよりは寧ろ消極的であると云はねばならぬ、共通の所より打算して如何なる事はなす勿れと云ふのみて、爲すべしと云ふとは出て來ないのである、其れ故に此の關係からは教導と云ふ事の眞の意味は出て來ない、眞の意味は却て第二の方面にあると云はねばならぬ。

第二の場合に於ても師弟の間に權力關係が存立せないとは言へない、否な實際昔時に於ては之れあるか爲め大に都合がよかつた、漸次社會が進歩複雜になつて人を教導すると云ふ事が、自然壹個の職業の樣になつて來た、又實際なくてならぬ樣な現今の時代になつて來ては、此の權力關係が大に薄らいて甚だ都合が惡くなつて來た、併し此の場合に於て權力關係は偶然に出て來たもので固より無くてはならないものてはない。

要するに先方の世界に適應した、即ち先方に取て具躰的の知識を與へる事と實踐躬行してよき行爲の模範を與へて指導する事が大切である、此の實踐躬行と云ふことは尤も指導と云ふことの本旨を持て居るものである、然し是れはあく迄自分と云ふものを沒却しねばならぬ、若し自分と云ふものか立つて居る指導であるならば、これは被教導者を自分の世界へ引き入れやうとするもので、全く教導者の無理であると云はねばならぬ、何故無理かと云へば社會の進歩によりて統一か難いと同時に各人間に變化多樣のあることを要求するものであるから、人を自分と同樣なるものにすると云ふことは即ち一致の黙のみを作らんと欲するのてあるから、勿論出來ない要求で洵に無理な事である、稍もすると遍屈な宗教家や道

學者流の内には此の無理をするものが多いのである、然るに自ら自分を無くしてかゝると云ふことは、神や佛に非らる限りは殆んど出來ない事であるのみならず、社會が複雜になつて分業と云ふ事が盛んになつて來ては、萬能に達することは到底六ヶ敷き事で、治者となつては堯たり舜たり、牧者となつては牛羊足ると云ふ樣な、昔の理想は現代に於ては到底空想たるを免れない、其の上愈々複雜になつて來ては所謂實踐躬行して導く範圍が漸次縮少さるゝ傾きがある、昔の例を取れば中江藤樹の如く萬能に通してあつたから、其の教導は萬民に及んだのである、今は中々左樣には行かぬ、宗教家として立派な人なれば宗教社會では尊重されても、一歩他の社會へ出れば最早其の名さへ知らぬと云ふ程の極端な場合が狹き日本の内でも事實になつて居る、斯の如く實踐躬行と云ふことは今の世には漸次迂遠となるのである、て此の缺點を補ふものは即ち知識て以て自分の考へを人に傳へると云ふことである、是れと同時に實踐躬行が伴へば上々てはあるが、必ずしも無くてならないと云ふものではない、又知識は元來が普遍的の性質ゆゑ、現代尤も廣く用いられて居る所のものである、然るに是れにも亦其の用をなすに不完全な點が澤山ある、其の理由は或は前述の事柄と重複するかも知れないが、次の如くである。

第一知識は斯くありし所のものに就いての自己反省より起るものである、未來に關したものでない、其が未來に關し得るかの如く思はれるのは、過去にありし如き關係が未來にも存するとしての事である、例へば明朝太陽が何時何十分に東より登るとするのも、太陽系統と云ふ關係が其の時も亦過去にあつた如く繼續すると假定しての上である、若し此の關係が今にも變化すれば明日太陽が東天より登ると云ふことは又出來ない事となるのである、其れで嚴密に言へば知識は未來に關係するものでない、物を創造するものでない、其れ故に前にも述べた如く「斯々ある事」に關して知識を以て得ることは唯一の方法てはあるが「斯くあるべし」と云ふことに就ては、嚴密に云へば最早其の力の及ぶ所てない、即ち何に〳〵の事は今の境遇に適切てあるから之を爲せよ、適切てないから爲すべからずと云ふ事は知識て云ふ事は出來たにせよ、更に其れを爲せし以上に於て其の人に取つて果して善であるか惡であるか、立證する事が出來ないのである、即ち其の人の世界が只今の世界と其をなした時の世界と變化したならば、結果は全く其の意味を異にすると云はねばならぬ、而して此の世界の變動する事は、社會と複雜なる關係が生し來る丈其れ丈甚だしいのであるから、知識て教導することは威嚴が滅殺されてしまふ、即ち他の語で云へば信仰かなくなる、信仰がなくなれば自分が自分の世界で自分勝手に作つた理想の爲めに、行動する事の多くなるは理の當然である。

第二に知識は元來抽象的なる特種を離れて普遍に至るものである、其れ故に知識て教導する場合に於ては普遍的なる性質のものである、前述の如く元來教導することは被教導者には具体的ならざるべからずと云へる事に反對の性質である、即ち或る事が其の人の行爲を促すには、其の人の世界に取りて價値あるもの、現在の世界より一層貴重のものであると感せしむるにいたらなくてはならない、然るに普遍的のものにば必ず此の性質があるとは言へないのである、例へは道德の事を書いた書物は商人には讀まれないと云ふ樣な事て、若し知識を與へたものが自己に適切てないならば薬て顧みない事となる、而して亦社會が複雜になればなる程甚たしくなる、即ち分業の結果て倫理學の樣な教導方面の事を研究するものは愈々廣く深く研究するから、學問としては非常に價値ある進歩をしたけれども、其れ丈け普遍的となり他方の教導さるべき方面の人々の世界は、愈々分化して來るのであるから兩者の間に愈々齟齬を來すのである、勿論此の現象を生した事は我等の理想に叶つたとは言へない、一方に於て分化があれば、他方に於て共通な點が認知さるゝ譯て、即ち平等の認知と差別の認知は相伴ふべきてある、然るに現代の狀態は差別の認知の方に多く傾き、共通の點の認知に粗略である、兩者の齟齬に就ては學者の方にも勿論罪はあるが、一般の程度が學者の研究を取り入れ得て、其を眞に自分に價値あるものと認める程に進歩して居らないと言はなければならぬ、（此の點に關しては先々月發行の教育學術界に掲げた拙文「同情說より見たる行爲の標準」の參照を望む）然し此れも現今指導難の一てあるとは確かなる事實てある。

教導難の起る理由を大躰分析して見ると先づ斯樣てある、勿論以上は只六ヶ敷いと云ふ方面の事のみ論じたので、此に對する處置の事は一言も論ぜなかつたのである、以上の所論のみから推せば社會の指導などは如何にも不可能である、何れも難點許りである、寧ろ教導といふ餘計な事は思はず、自ら安立するに如かずとの考へをいだすのが正當な如くに見ゆるでもあろうが、斯かる推論の出づるとは余輩が此の一篇を草する目的でない、近代の文明の父とも崇むべきベーコンが言ふた如く人間の學問と人間の力とは一致するものである、何故なれば原因を知らずして結果を出すとは出來ない、自然は服從して始めて征服されるもので、我等が熟考して原因を知れば其は我等が運用するに於ての規則となるものであると、我等は自然の一物として自然法に規定されて全く不自由なものてあるが、ベーコンの言を守つて始めて現今の如く自然を征服した大自由が得られたのである、人を教導するに就ても亦同樣てある、決して失望すべきものでない、其難事を知ることがやがて教導上の規則となり、其處で始めて其難事が征服されるのである。

温知

龍樹菩薩烏陀徳那王に與ふる書（續）

松本文三郎

親友書

（舊一―　爲禪陀迦王說法要偈
舊二―　勸發諸王要偈
新―　勸試王頌）　署符

文殊師利鳩磨羅浮多

（新舊共に此文なし。新には之に代ゆるに左の一頌を挿入す。

有情無知愛心故、　由此興悲爲開解、　大德龍樹爲國王、　寄書與彼令修學

と、是れ明かに後人の附加するところたり。）

一、嗚呼爾福樂大德王、修伽多（善逝）の言說今我茲に署述す、此聖偈を聽き以て功德を修すべし。

（舊一には禪陀迦王應當知、生死苦惱多衆過、悉爲無明所覆障の句あり。舊二には明勝功德王、我無餘求想を以て初一句を譯し、新には最後に此頌名爲聖祇底の句あり。）

二、善哉、修迦陀の像は、粗木以て之を雕るも、賢者は之を尊ぶ。我か言鄙なりといへとも、亦是れ妙法の宣說、爾其れ之を輕ずること莫れ。

三、爾嘗て僅かに大聖牟尼の敎法を聽くあるも、白璧は月光に映して愈其の白さを加ふるあるにあらずや。

（舊一には後半を譯して猶如蓮華色淸淨、月光垂照踰暉顯となす。）

四、耆那敎ふるところの六念、佛法僧施戒及び天は、各其の德に隨ひて臆念忘れさるへし。

五、身口意の三業に於て、善く十種の戒を守り、酒を飲むを禁せり、一生正歡喜あらん。

六、財貨の不定にして無情（アサーラ、註に貪慾嬰くことを知らさるにより之を無情といふ、）となるを知り、如法に之を比丘、婆羅門、貧者朋友に頒つへし、施は是れ最善の友なれはなり。

七、戒を持すること俊嚴過つなく、純一無雜なるへし。大塊は動靜の依りて存するところ、持戒は一切殊勝の依りて立つところなれはなり。

八、旋戒忍辱精進禪定及び智慧の無上德を修せは、生死海の

彼岸に達し、最勝王の位に上るへし。

九、能く父母に事へて孝ならは、梵天導師其の家に生れ、（舊一には此句を欠く、）名聲遠近に聞へ、遂に生を天界に得。

十、殺盜婬妄語飲酒せされ、非時の食と高厦大牀と、歌と舞と華鬘の類とを去れ。

十一、若しくは男、若しくは女、此菩薩の八戒を持するも、心に之を欲せは、再たび生を欲界（カーマーヴァチヤラデーヴァ）に受くへし。

（舊一には若少時間修此戒、必受天樂昇涅槃とし、舊二には捨身生六天、所慾悉隨意といひ、新には欲界六天上、長淨善當生とあり。）

十二、貪誑諂淫怠慢慾憎と及び氏族相貌名聞壯勇若しくは權勢に誇るとは、爾の之を視ること猶ほ怨讐の如くなるへし。

十三、牟尼は嘗て誨へ玉へり、細心は是れ不死（マムリタ）の家、塵心は是れ死の家と、爾常に謹愼以て善法を學せよ。

（舊一には之を欠く）

十四、始め塵心のものゝ後善く細心に行ずるは、譬へは猶ほ明月の風雲を離れて美なるが如し、ナンダ（難陀）アングリマーラ（盜婆利魔羅）クセマンダルシン、ウダヤナ（烏陀徳那）は皆此類なり。

（頌中記するところの人名に就きては、ケルン佛敎史、ターラナート佛敎史、シーフチル佛陀傳等を參照すべし。舊一には此頌を譯して猶如指鬘與難陀、亦如耆摩賢聖等となし、舊二には難陀以下の文を除き、新には孫陀羅難陀、央具理摩羅、達合綺莫迦、醜惡皆成善となす。）

十五、忍辱は是れ難中の難、一切瞋恚の門を杜ちよ。佛は說き玉へり、瞋を去るものは不還（又不來、阿那含、アナーガミン）の位に上ると。

（舊一には之を欠く、）

十六、人我を非り、我を難し、若しくは我を打たば、此に憎生し、爭起る、而も爾一度び恨念を去らば、晏然として眠るを得べし。

（舊一舊二には共に之を欠き、新は前半を譯して、他人打罵我、欺掠奪我財云々となせり。）

十七、爾應さに知るべし、人心は譬へば猶ほ地水と石上とに畫けるに似たり、惡者は前の如く、善者は終に似たり。

（此頌意義甚だ明了ならず、舊一には之を欠き、舊二には有瞋如畫水、或如畫土石、若說起煩惱、初人則爲勝、改惡修慈忍、第三則爲上といひ、新には知於水土石人心盡彼仝、起煩惱前勝、愛法者如後と譯せり。）

十八、耆那は說き玉へり、語には三種あり、心に快きと、眞なりと非眞なるとなり、是れ醍醐の上味の如く、美しき花

の若く、不淨物に似たり、非眞人は爾其れ之を言はざれ。
十九、有情に四種あり、明より明に往くと、暗より暗に往くと、明より暗に往くと、暗より明に往くとなり、爾唯明より明に往け。
（註、明とは輪廻上道に進むをいひ、暗は下道に墮するをいふ。）
二十、人亦菴摩羅果の如くなるを思へよ、或は生熟の如く、或は熟生の如く、或は生々の如く、或は熟々の如く見ゆることあり。
二十一、他人の婦を視ること勿れ。爾若し之を見は、其の長幼に從ひ、爾が母、爾が女、若しくは爾か姉妹の如くに之を觀せよ、爾若し之を愛せは、唯其の不淨を觀せよ。
（第二十五頌を參照すへし、）
二十二、爾か名聞、爾か子女、爾か珍寶、將た爾か生命の如く、爾か不定心を防持せよ。一切欲樂を見ること、宛も身蛇毒劍戟（舊二には此に怨憎の二字あり、新にも怨の字あり、）猛火に觸るゝか如くなれ。
二十三、五欲は其の身を壞す、是故に耆那王子は之を以てキムバーカ（兼博）樹菓に喩へ玉へり。爾唯其れ之を去れよ、其の鐵鎖によりて以て世界は輪廻の獄に繫かる。
（舊一には之を欠く、）
二十四、衆敵と戰いて之を敗らんよりも、寧ろ無常輪轉の六境を破したるものをは、聖者は大勇猛者として賛歎すへし。
二十五、少女は体惡臭を放ち、九個の深竅ありて滿ち難く、一切不淨の器に似たり、其の花彩亦唯此一面よりして觀すへし。
二十六、癩蟲其の身を侵さは、火に依りて其の苦を濟せんとも、竟に靜を得す、欲に惱まさるゝもの亦復此の如し。
二十七、第一義諦を得んと欲せは、之を心に銘し、之を靜思すへし、唯是れ功德の法、餘亦有ることなしと。
二十八、假令ひ位と美と學とあるも、若し戒を修せされは、以て殊勝と爲さす、善く此二德を具備せは、他缺くるあるも、人は之を尊ふへし。
二十九、爾善く世態に通す、應さに得喪禍福、毀譽褒貶の八俗態に累はされ、是れ爾か思慮の境にあらされはなり。
三十、婆羅門、比丘首、天、父母、妻女、臣子の爲めに罪を犯すこと莫れ、何物か能く地獄に墮して、爾か罪を助け消すへき。
三十一、罪業を犯せるものは、其の苦戟を以て之に當つるか如く然らずといへとも、死時一たひ到らば、必らずや其の親から犯せる罪業の報を受くべし。
三十二、信戒施聞慚愧謹慎（舊には之を欠き、後七財の字なし、新には淨の字を以て之に充つ、）慧、牟尼は之を七財と說き玉へり、他の財は一切共有にして用なし。

三十三、博戲、稠座の處に覓め、懶怠にして、惡人と伴たり、酒を飲み、夜中に彷徨すれは、皆是れ邪道に墮す、爾其れ之を遠離せよ。
三十四、人王の導師は說き玉へり、一切の財に於て、知足は是れ最勝と、是故に爾常に足ることを知れ、足ることを知らば、假令ひ一物有せざるも、爾は已に富めり。
三十五、嗚呼尊者欲少きものは富者の如く苦します、多頭蛇王の一々の頭より苦患は各別に生し來る。
三十六、婦女若し宿敵と伴たらば、復讐神の如く、家主を蔑如せばターラー（陁羅）の如く、（舊二には名爲二輕夫婦一となし、新には如二勇愚一とあり、）假令ひ極微も之を竊まは、盜の如くに相似たり、爾之に配ずること莫れ。
三十七、然れども姉妹の如く爾に順ひ、朋友の如く爾を益し、將た生を慮かること母の如く、命を奉すること、婢の如くならば、爾は宅神として之に歸敬せよ。
三十八、爾應さに之を知るべし、齋を受くるは、元と藥を服するか如し、愛憎により、强健慢美麗ならんか爲めに、之を用ふること莫れ、唯以て爾か身を持することを期すべし。
三十九、二六時中と初後夜中と佛戒を念誦し、寢に就くも睡時亦果なきことあらざることを忘れされ。
（舊一には一夜分別有五時との解句を入る、）
四十、常に善く慈悲と喜捨とを行へよ、假令ひ未た殊勝を得ざるも、亦能く梵天の福を受くべし、（未完）

附記、本誌前號には南條博士勘後諸王要偈の著者に就き、博捜教誨せらる、此に謹みて謝す。

松本文三郎

勞働組合の利害

池山榮吉

◎前回には勞働組合の目的、本質、組織、行働等に就てお話したから、今回は其利害に就いて論じて見やうと思ふ。凡そ物に一利一害のあるは數の免がれざる所で、正宗の刀も使ひ人といふが、勞働組合の如きは、刀に譬へていつて見やうなら、慥かに村正的の切味のある逸品で、其使ひ方如何に依つては隨分危險な結果を來たさないとも限らない。て、この村正の名刀たる勞働組合が、果してよく其の本來の目的を達する上に於て、充分の功を奏するや否やは、一定の條件の存否に係ることで、就中其使ひ人たる勞働者の程德の程度の如きは、最も重要の關係を有つてる事柄てある。されば勞働組合の利害といふことは、各國を通じて一概に論じ得らるべき問題てはないので、其の國〳〵に行はれて居る政治、經濟、道

德等の發達の程度に依つて、組合は、或は大に社會の健全なる發達を助成する手段ともなるべく、又或は却て之を阻害する方法ともなるべきである。例へば、若し或る勞働組合にして、遮二無二自家の利を追ふに急にして、毫も一般社會の体戚を顧みないときには、其組合は純ら鬪爭を目的とする道具となつて了つて、社會階級の反對は爲めに益々激烈を加へるのみで、其結果、啻に企業者又は消費者等の正當の利權を害するのみならず、延いて自家の損を招くに至るべきは智者を待つて後知るべきでない。組合の行働にして果して斯くの如きものとすれば、其の太く社會の同情を失して、蛇蝎視さるゝに至るは自業自得て、斯んな組合は無論ない方が餘程よいのであるが、併し元來勞働組合といふものは、たゞ偶然に或る二三の邦國に起つた現象ではない、苟も資本的經濟制の行はれて居る所では、早晩必ず起るべき現象なので、我國も亦將來決して此の數に漏れることは出來ないのであるから、假りに勞働組合が、前述の如き極端なる態度を採らぬものとして、今より其の利害を講究して置くとは極めて必要のとゝ思はれる。

◎勞働組合の利害を講究するに就ては、社會全般の上からと、直接利害關係人の上からと、この兩視點からするとが出來る。而して利害關係人の中には、大体、勞働者、企業者、消費者の三者があり、また同じく勞働者の中にも、勞働組合に加入せる勞働者と、否らざる勞働者とあつて、各々其利害を異にして居るから、皆別々に觀察する必要がある次第であるが、先づ勞働組合に加入せる勞働者の利害から始めることゝしやう。

◎勞働組合が、組合に加入せる勞働者に與へる利益に就ては、前回に述べたところで、大抵明らかなことゝ思ふから、茲には其反對說を掲げて、聊か批評を試みて見やう。勞働組合は、組合に加入せる勞働者に、何等の利益を與へるものでない、といふ說の主張する所は「勞働者が、多くもない勞賃の中からヤットの思ひをして、僅かに節し得た若干錢を、勞働組合の金庫に投ずるといふのは、實に愚極まつた話で、縱令組合はなくとも、同盟罷工は行らずとも、市場が好況を呈しさへすれば、勞賃は期せずして自からよくなつて行くものであるし、また自然に然うならない以上は、何んな組織があつたとて、到底何の役に立つものでない。假りに若し、同盟罷工と組合の保護との爲めに、一時勞賃の上騰を來したとするも、因て生ずる利得をば、勞働者が斷ねず組合に納附したる出資額と、罷工中得べかりし勞賃額とに比すれば、遙かに少額に過ぎない、即所謂得る所失ふ所を償はざるものである」といふので、これは、恰も夫の保險の如きは馬鹿氣た制である、之れよりは保險に入つた積りて、保險料丈ケを、チャン〳〵と銀行にても預けて置く方が割てある、といつた樣な、チト利

口過ぎて、却て實地の間に合はない說といはざるを得ない、損して得とれとは、活社會に處する須要の方略で、勞働組合の指導宜しきを得るに於ては、慥に海老て鯛を釣る位のとは出來るのである。

▲全体この說の理論上の根據とも看做すべきは、主としてミルの主張した所謂『勞賃基金說』と、ラッサルの主張した所謂『鑛製勞賃法』の二說であるが、孰れも今日では、經濟學上、明かに其の誤謬なると　が證明されて、既に業に古物倉庫中に藏されてる代物である。所謂『勞賃基金說』とは、「國民の所得中、勞働者に支拂はるべき額は、自から一定して居るもので、企業者は、其資本中より、この額以上の勞賃を支出する譯に行かない、であるから、勞働者は、總体で右の一定の額を、各自の間に分割すべきもので、勞働者の數が多ければ、多い程勞賃は少くなり、その反對に、勞働者の數が少なければ、少い程勞賃は多くなる筈である、即勞働者の多少は、反比例的に勞賃の增減を來す、」といふ說であるが、一定の勞賃基金なるものゝ存在して居るものでないことは、幾多學者の反覆論述した所に依り、一點の疑ひを容るべき餘地がない。而して國民の所得は、大別して、土地、資本、及び勞賃の三者より生ずるもので、また勞賃の所得中にも、勞賃と、所謂企業者利得との二つがある所から推せば、土地又は資本より生ずる所得、又は企業者利得の幾分を減じて、これを勞賃の方に加へることは、理論上可能なるのみならず、歐州に於ける、最近數十年間の勞賃の沿革は、實際之を事實にして居る。加之、企業の振興、資本の增加、內國に於ける需用の昂進、輸出の增加等は、相俟て、急劇なる人口の繁殖に伴ふ勞働供給の增多に對し、勞働需用の增多を招致し、啻に勞賃遞減の効を緩ふせるに止まらず、人口の割合に從前より、より多くの財を製出するの結果、勞働者は從前に比し、より多くの勞賃を取得し、より多くの需求を充たし得るに至りたるは、是亦歐州に於ける、最近數十年間の實蹟に徵して、爭ふべからざることに屬するので、夫の『鑛製勞賃法』も、是に至て全く其の根底を破壞されざるを得ないのである。

▲抑もこの『鑛製勞賃法』とは如何なることを意味するかといふに、其主唱たるラッサルの解する所に依ると、「平均の勞賃は常に或る國民の慣習上生存の持續及び育殖に必要欠くべからざる生計費に限定せらるゝもの」即、勞働者の得る所は、原則としてかつ〳〵一家の口を過ごすに足りるだけに止まるといふことて、一寸聞くと極めて恐ろし樣な法則であるが、よく吟味して見ると、定義中「慣習上」なる語の挿入されてあるが爲め、其實無意味の恐喝文句たるに過ぎないことゝなるのである、其の譯は、一國の勞賃が、平均其國の勞働者の生計の度に應じて定まること、正當に言へば、勞働者の生計は、當時の勞賃額に應じて定まるものなることは、蓋し何人

も異存のない所で、問題はたゞ、その勞賃、若くは生計を昂めることが出來るや否や、即、昂き勞賃、若くは生計を、習慣的のものと爲すを得るや否やといふ點にあるので、勞働組合の目的は、畢竟然か爲さんといふにあることは前回に述べた通りである。而して若しその勞賃、若くは生計が、慣習に依つて定まるものとすれば、勞賃者は常にその慣習を、向上的方向に向はしめる樣に努めることが出來べきであるから、所謂鑛製勞賃法も亦驚くに足らないことゝなるのである。

▲斯の如く、『勞賃基金說』といひ、『鑛製勞賃法』といひ、孰れも理由なきこと明白となりたる以上は、之を根底とせる、前揭勞働組合無用說も、亦自から破れざるを得ないのであるが、それにも拘はらず、今日尙ほ往々にしてこの說の繰返へさるゝあるは、寧ろ怪訝に堪へざる次第で、是れ或は全く當今の社會事情に通ぜざるか、否らざれば、爲にする所あつて、言を之に藉りるか、二者其一に居るものとしか思はれない、勞賃の昂進に關して、組合無用說の取るに足らないことは、前述の如くであるが、該說の根據の如何に薄弱にして不備なるかは、勞賃以外の勞働條件、例へは勞働時間の短縮の如きが問題となる場合に想到すれば、更に明瞭となるのである、蓋し勞働時間の短縮は、敢て勞働者の所得を增すといふものでないから、假りに『勞賃基金說』、『鑛製勞賃法』を正當とするも、猶起るべき問題であつて、かゝる場合に於て、勞働者多數の團結の、如何に有力且つ須要のものたるかは、言を待たないことであるからである。猶、勞働組合の實際の効能如何を知るに就ては、組合の組織ある業務と、否らざる業務、組合に加入せる勞働者と、否らざる勞働者との間に於ける、勞働者生計狀態の相違を觀察するを便とするが、詳細は後日を期して紹介することゝしやう。

勞働組合の、組合に加入せざる勞働者に及ぼす影響如何に就て、組合を有害なりとする非難は、「組合に加入せざる勞働者は、其の勞働力の使用に就て、即、人身の自由に就て妨害を受けることがある」といふので、この非難は如何にも往々事實となることがあるのであるが、併し其の場合は、組合に加入せざる勞働者が、組合に加入せる勞働者の利益と、相反する態度を採るとき、例へば、組合に加入せざる勞働者が、組合に加入せる勞働者の同盟罷工の際、依然勞働に從事せんとするとき、若くは組合に加入せざる勞働者が、加入せる勞働者の要求するよりも、より低額の勞賃に甘んじて、勞働に從事せんとするときに限るものなることは、先づ注意して置かなければならぬ點である。それから、實際妨害を試みる手段にしても、或は身体に對する暴行の如き、不法なる直接强制の形式を採るものと、或は組合の利益と相反する態度を採る勞働者に對して、排斥の宣言を爲す如き、間接强制の形式を

採るものとは、其間大に區別がなければならない筈で、惟ふに、直接强制の如き暴擧に出づるの非なるは、固より論ずる迄もないであるが、間接强制に至つては、頭から非議すべきものでなく、寧ろ組合の自衛的手段と看做すべきである。而して今日の法制上、有益なる團体の爲めには、多少個人の自由を犧牲とすること決して珍らしくないのであるから、若し勞働組合が、果して社會に採つて有益なる團体であるならば、其の存立を認むると共に、場合により間接强制の手段に訴ふることをも、刑法の規に觸れざる限度に於て、認容して然るべきことゝ思はれるのである。併し勞働組合が、果して社會に有益な團体であるや否やは、是からだん〳〵と說く所に依つて定まる問題なので、茲にはたゞ、その積極的斷定を前提して、勞働組合に間接强制の手段を認容するは、不當でないといふことを斷言して置かう。

▲前段に論じたる所は、勞働組合が、組合に加入し居らざる勞働者に及ぼす影響の、不利益なる方面であるが、今度は更にその利益なる方面を觀察しやうと思ふにつけ、うの前に、今一つ勞働組合は、組合以外の勞働者に採つて不利益なり、とする說を紹介する必要がある。其說とは「組合に加入せる勞働者の贏ち得たる勞賃の增加は、勢ひ組合に加入せざる勞働者の勞賃の減少を惹起すべき筈である、何となれば企業者は、一方で余計に支出した分を、他の一方で埋合せなければならないからで、故に勞働組合は、組合以外の勞働者に損害を及ぼすものである」といふので、是は夫の前述の『勞賃基金說』から割出された議論で、兎や角いふまでもなく、事實は明らかに其反對になつて居る。即、勞働組合に加入せる勞働者の勞賃が騰れば、從て又同一の業を執る組合以外の勞働者の勞賃も騰るのが例となつて居る。爾餘の勞働條件、例せば勞働時間の短縮の如きに就ても亦同樣で、畢竟、組合に加入せる勞働者の贏ち得たる勞働條件の改善に就ては、組合以外の勞働者も大抵其の利を共にすることが出來るといふことに歸着する。而して勞働組合が、組合員たる勞働者の爲め、常に勞働市場の雇勞を維持し、回復するに努むるの結果、間接に一般勞働者に及ぼす利益は莫大なものである。之を要するに、吾人は、組合に加入せざる勞働者が、勞働組合に依つて享受する利益は、組合に依つて或は受くることあるべき損害に比して、遙かに多大なるものありと斷定して、謬らないことを確信するのである。

◎勞働組合の企業者に對する利害如何に就て、第一に起る問題は、勞働組合は、勞賃の增額、執業時間の短縮等に因り、勞働力を高價ならしむる結果、企業者に損失を及ぼすとなきやといふ問題であるが、勞働力の騰貴は、必しも企業者利得の減少を伴ふものでない、企業者は種々なる方策に依り、例へは、或は製作物の代價を昂め、或は生產高を擴大し、或は

技術、機械、若くは作業組織の改善に依つて、生産力の増進を圖り、依つて生ずる收入の増額と、勞働力の騰貴に因る支出の増額とを相殺せしむるとが出來るのである。就業時間が少くて、而も多くの勞賃を得る勞働者の從事する工業の利得が、反對の條件の具備する工業の利得に比し、寧ろ優るあるも決して劣るなきは、吾人の屢々見聞する事實であるが、是れ軈て勞働力は騰貴するも、企業者は猶ほ其利得を維持し、増進する上に於て、種々なる手段を有するとの證據である。

勞働組合あるが爲め企業者に採て都合のよいとは、勞働組合は、國内一般、若くは少くとも當該地方一般に通じて、勞働條件の均整を圖るとて、是が爲め、或る企業者が、勞働條件の改善に關し、組合の要求に應じても、他の企業者も、矢張り同一の要求を容れるとゝなり、且つ組合が常に其履行を監視するとなるから、組合の要求に應じたる爲めに、同業者間の競爭に敗を取る虞れがない。それから、組合に依つては、組合員にして、企業者に對し、不當の行爲ありたる者を嚴重に取締り、規律を正すとに注意するので、是れまた企業者に尠なからぬ便益を與へる。猶ほ最後に考ふべき問題は、組合組織と同盟罷工との關係で、一方に勞働者組合、他方に企業者同盟と、各々其の旗幟を鮮し、兩々相對して陣取つて居る姿だから、一旦戰鬪が開始された曉には、其結果の頗る重大なるものあるは固よりであるが、併しその結果の重大なる丈ケ、それだけ双方の指導者も、亦重大の責任を感ずる譯で、勢ひ愼重の態度を採るに至るは自然の數である。若し同盟罷工を以て絶對の僻事なりとすれば格別、利權伸張の方便として、避くべからざる措置なりと認むる以上は、其の運爲の輕擧盲動に出でざるこそ、最も望ましきことで、勞働組合は此點に於て、能く其希望を充たすものと謂ふべきである、蓋し戰鬪準備の充實が、却て平和の保障となることは、單り國際に於てのみ見る現象ではないのである。

◉上來述へたる所に由つて觀れば、勞働組合は、必しも企業者に損失を及ぼすものでないことは明かであるが、さて消費者に對する利害は如何であるかといへば、是亦同斷の結論を得るのである。蓋し勞働力の騰貴は、必しも商品の騰貴を來すものでないことは、既に述べた通りで、勞働力の騰貴が、必しも企業利得の減少を來たすものでないと一般である。併し勞働力の騰貴した場合に、企業者が他の方法、例へば生産力の増加、販路の擴張、企業利得の減少等に依り、相殺の道を講ずることの出來ないときには、商品代價の騰貴せしむより仕方のないとがあるは勿論である。が、實際此に所謂他の方法に依つて埋合せのつかない商品は、概して良好の品質を具ふる物、若くは所謂贅澤品であるので、是等の物品の購買者は、多少從前より余分の代を拂つた所が、さまで痛痒を感

ずるでもなし、是に由つて、幾分か憐むべき勞働者の他位の改善に資することが出來ると思へば、却て理想上に於て充分の滿足を得られる譯である。それから、勞働者は、また同時に消費者たる資格を兼ぬる者であるのだから、消費者の利害と、勞働者の利害とは、半ば合一するものなるとは特に注意すべき點である。

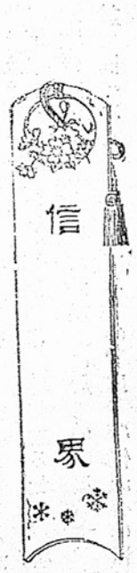
◉社會全体の上から見ての勞働組合の利害如何、換言すれば、勞働組合の社會開明の發達に及ぼす影響如何といふに、此の點に就て勞働組合の貢献する所は一にして止まらない。以下其主なるものを擧げんに、第一、勞働組合は、生産力の昇進を助成し、資本制の良方面を發揮するものである。蓋し勞働組合は、可成勞働力を騰貴せしめんとを圖るもので、勞働力の騰貴は、勞ひ生産力の増進を余儀なくするものである、商品の代價を増し、以て勞働力の騰貴と相殺せしむるを得ざる限りは、企業者は、努めて生産力の増加を圖り、各箇製造品の生産費中に於て、勞賃の占むる割前を、可成少くする樣にしなければ、到底充分なる利得を見ることは出來ない。高き勞賃、短き執業時間が、必ず巧妙なる技術と伴ひ、安き勞賃、長き執業時間が、必ず拙劣なる技術と伴ふ現象は、全く前述の理由に基くので、此の意義に於て、勞働力の騰貴を圖るは即、社會開明の進歩を促す所以であると稱するとが出來るのである。

▲勞働組合は、斯の如く一面、資本制の良方面を發揮すると同時に、他面に於ては、資本制の缺點を補充するものである。而してこの方面に於て、第一に想起されるのは、勞働組合は、勞働者階級をして、從來よりも、より多く、生産收益の分配に與かるを得せしめ、社會大多數の人民の富を昂めるとて、次に、是よりして直接に生ずる結果は、社會大多數人民の消費力を増進し、爲めに、社會經濟の恐慌を緩和し、經濟發達の順勢を助長することである。それから、資本制に伴ふ避くるからざる弊は、資本制の發達すればする程、益々經濟上獨立の地位を失つて、勞働者の群に投ずる者の増多すると同時に、他の一方では、愈々個人の自覺が高まり、獨立の念が旺んになつて、彼れ勞働者たるものが、資本家の專横なる頤使に甘んじなくなるといふ、殆んど、して見やうなき矛盾の起ることであるが、勞働組合は、此の問題の解決に、大に與つて力あるものである。

▲抑も勞働問題の解決に於て難しとする所は、必しも勞働者の物質的地位の改善を圖るのが難いのではないので、如何にすれば一面、勞働者をして獨立の地歩を占めしめ、他面、經濟發展の基礎たる資本制を維持し、擴張することが出來るかといふ點である。而して前回に詳述したる如く、勞働者對資本家の關係をして、單に法制上に於てのみならず、事實上に於て同等ならしめんとするもの、即、勞働組合の目的であつ

て見れば、勞働組合は、善く前示の要求に應するものといふべきで、資本家專制の弊を矯め、資本家勞働者双方協商の道を開くもの、勞働組合を措て外にないのである。此點は實に勞働組合の特徴で、到底夫の國家、若しくは資本家の經營に係る勞働者保護事業、又は一般の慈善事業の能くする所でない。

▲之を要するに、勞働組合は、資本主義と社會主義との調和を圖り、專制的資本主義を改めて、立憲的、若くは共和的資本主義となさんとするもの、即、從來の資本制の社會組織を革新して、一種の『社會的資本制』とも名くべき形式と爲さんとするもので、其の、實成的社會政策の立場に依り、徒らに空想を以て事とせざるは、特に稱すべき點である、惟ふに、二十世紀の世界は、一面、益々資本的形式の擴張すると同時に他面、愈々社會的形式の發展する舞臺であつて、此間最も重要の役目を演ずるものは、勞働組合であらふ。勞働組合の使命も亦大なりと謂ふべきである。吾人は、二十世紀の優勝國たる我國に於ても、亦勞働組合の健全なる發達を爲さんことを切望するものである。



信心爲本

羅村生

宗教は信心を以て動くものである、吾人にとりて信ずるは力である、絶對無限の佛を信頼した時に何の恐が、又世に存するものぞ、直往邁進するのも、退嬰固守するのも、其所信を貫くといふ、眞摯な熱情があれば、假令其結果が如何であるかは敢て顧慮すべき限でない、吾等は意志の頗る薄弱な者である只壽命無量を體とし、光明无量を用とせる佛に憑依するが故に勇猛の心が生ずるのである。

世に或は王法爲本などゝ說く方もあるが、予は信心爲本でなくてはならぬと思ふのである、若し此信心が本となつたならば、世の中の事が總てもう少し眞摯になるであろうと思ふ

今の世はあながち五濁惡時惡世界であると一概に悲觀するにも及ばぬが、去りとて百華繚亂、異香芬々たるエデンの樂土であると樂觀することは猶更出來き難いのである、苟安と放縱、懷疑と墮落、是等は現代に著しき風潮であつて、又社

會の病弊でなかろうか、試に政界の事業に就て見ても、朝野共に、たゞ小刀細工のみ多くて、昨是今非、表裏反覆、更に大方針といふものが少しもない、實に無定見である、無節操である、「ドーモ仕方ガナイ」といふ、都合よき語は、自他の責任を逃るゝ好辭柄として、昨今頻りに濫用せらるゝのである、始めから確乎たる決心もなければ、所信もなきものが、どうして、其事業の徹底が望まれやうか、「ドーモ仕方ガナイ」のでない、始めから、眞摯になる氣がないのである、實に苟安である、姑息である、隨て放縱である、眞摯率直にして、熱誠といふ樣な風は、少しも世に存して居らない、斯の樣な時だから、オリヴァー、クロムウエルを追懷する人のあるのも決して無理ではない、

一年少學生が「巖頭の辭」に哀を留めて華嚴の瀧に投じてより、世の中の人は俄に懷疑の風潮を論じ、自殺の非行を說くものがあるけれども、今の樣な敎育の方法では、眞面目な考を以て、人生などいふ問題に逢着したならば、どうも此の樣な結果になるのも、無理でないと思はれる、何も懷疑の風潮や、自殺の非行が昨今始つたものではない、厭世文學者北村透谷が、溢死を遂げたのは早や十年も前の事であつて、其前後から今日に至るまで、此の樣な徑路を取た人が隨分澤山である、假令自殺を遂げないても、懷疑の結果、煩悶の餘り遂に自暴自棄して、墮落した、青年者の數は實に夥しき數であつて、彼等は華嚴の瀧壺には投じないが、奈落の淵に墮在して、精神的の自殺を遂げたものである。吾等は此種の人に向ては同情の涙を禁じ難いのである、苟安姑息にして此のもう二度と受け難き人生を醉生夢死と云ふ樣な、無意味な生活に、何の甲斐もなく、暮して果てる人よりも、無慚無愧な放縱なる生活に尊き此の娑婆世界を汚しつゝある人よりも、眞面目に人生を思議しやうとした人は、どれほど尊いか知れぬのである、若し是等の人に、轉向上の活路が開かれて、大悲大智の光明が認め得られたならば、どれ程幸福であつたであろうか、思へば殘念な次第である。

然し何れにしても、面白からぬ世の中の風潮に相違ない、其他何の事業でも、効果の比較的擧らぬのは何れも、誠意誠心にやるものがないからである、社會事業などいふ事は、近來の流行であつて、今日迄に發起せられ、創立せられた處の此種の會は實に夥しき數であるが、何れも其實効の擧らないものばかりで、流產するものが多いのである、兎角慈善事業などは、一種の信仰から溢れ出たのでなければ、どうも都合よくゆかぬ樣に思はれる、光明皇后の事業、忍性上人の事跡に就て見てもわかる、身は國母の尊きに居て、其外氣にも觸れ給ふ事の稀なる御手もて、見るも穢らしき、癩病患者を愛撫し給ふたと云ふのは、內に燃ゆるが如き敬虔なる信仰心があつたからである、今の貴婦人方の慈善事業は如何であるか

其處て吾等は世の中のあらゆる事業、人間の總ての行爲が共に皆な信心を本としなければならぬと思ふのである、絶對無限の大悲の如來の實在を信じ、無限なる大悲の恩德に感泣し、確然不動なる安住の地歩を占め得たならば、總ての事業行動は皆な信仰の上から動くべきてある、此の時には名聞利養の考は毛頭交ゆべきものてない、凡て人間は行爲の間に名聞利養の考へなければ、眞面目てある。

さて人間には理想といふものが必要てある、これあるが爲めに、政治も善良となる、文學も進歩する、美術も優秀となる、而して究竟なる理想の極致は佛てある、此の理想は決して空想てない、宗教の理想は實在てある、此の理想の上に立たなければ人も世も圓滿にはならぬ、而して此の理想に體達するのは大信心である、彼の大信心は佛性なり、佛性即ち如來なりといふのはそれてある、即ち吾等は信仰の爲めに如來の心光に一味となるのてある、既に如來の心光と一味となつた以上は、萬事萬行眞摯率直てあつて、誠心誠意にならなければならぬ、そうなつたならば世の中が如何に立派になり、人生が如何に尊くなるてあらふか。そうなるのにはどうしても信心爲本でなければならぬ。

かく云へばとて吾等は決して成立宗教の爲めに、社會人世を利用せしめんとするのてはない、元來宗教といふものは宗派の爲めの宗教てない、又宗教家の宗教てもない、人々各自の宗教である、貴賤貧富、老幼男女皆な等しく、有つべきものである、宗教の前には總て無差別平等である、人は何時迄も無信仰で居られるものてない、世は何時迄も懐疑に滿されて居るべきものてない、苟安姑息の惰眠も醒さなければならぬ。懐疑煩悶の迷妄も棄てねばならぬ、迷へる羊迷宮に入りて益迷ふ、自ら是を解かんとするのは益迷に踏込むのである霖雨打續きて氣も心も何となく、陰鬱な今日此頃、兎角明赫奕たる光明が望まるゝのである。

人生の弱點

百目木智璉

一笑名心猶未止、墓碑尚競石高低、と云ふ誰やらの句があるが。兎角名譽とか、利慾とか、權勢と云ふものはどうしても念頭を離るゝことが至難のものと見ゐる。現に生存して居るものは勿論の事、最早此世の人ならずして一抔の土、苔滑かなる處、五尺の形骸を横へて靜に眠る其上に建てられた一基の石塔に至るまて、尚高低を爭ふにいたりては沙汰の限りと云はねばならぬ。人間はどこまても虚榮心が離れぬものと見ゐる。小さき話てあるけれども、同じ瀛車に乘るにしても三等に乘るは、何となく肩身が狹いやうな氣持がする、殊に親戚故舊が見送りてもせらるゝ時は、外觀を飾りて二等

を選ぶか如きは往々傳へきく話てある。こんな兒戲に等しきことをなすも、全く泡の如き虚榮心より來るのてある。僞善者と云はれて氣持のよいものがなからうか、これも虚榮心の煩惱が狂ひ出して抑へきれぬ爲めてあらふ。虚榮心がある斗りて胸中幾多の苦悶が生じ、幾多の波瀾が起伏して、船体を安全に彼岸の目的地に進めることが出來ぬてある。

何ぜ人間は赤裸々として一點の飾り氣なき所を好まぬてあらふ。賢者と云はるゝより愚者と呼ばるゝ方が、どれ丈自身の心に於て氣樂かも知れぬ。殊更に賢者振りて徒に邊幅を修し、外觀を飾るなどは虚榮心の甚しきものてある。世には親子の衝突を憂ふるものがある、親は子を愛し、子は親に慈くしむ、其洋々たる平和の家庭に於て、何等の障碍も衝突も起るべき理由はない筈てある。而るに其間に溝渠が築かれ、平和の泉が堰き止めらるとすれば、そは徒に外形に奔りて精神の融合を見ざる爲めてある。親は親として、子は子として互に隔心をすてゝ、眞情を盡くすに於て何等の衝突があらふぞ眞情の發露する所純一無雜にして一點の汚れを容れない、所謂純白雪の如しとても云ふべきてある、もとより虚榮心の如き慾望は毫も起るべき筈はないのてある。時としては十年の知己一朝にして怨敵となることは敢て珍しくない、うはべは眞の朋友と見せかけて其實、心の水は濁りて居つたのてある、親切らしく持ち運んだのは友を賣る手段てあつたのてある、かくして交情の永く續く筈はない寧ろ怨敵となるは當然の事てあらふ。利を以て集るものはまた利に依て散ずるは勞の然らしむる處て、現時社會の眞相を穿ち來れば利を以て集ると云ふても過言てない。要するに人と人との關係は全く利害問題に過きざるのてある、人間は實に淺薄なものてある。如何にも分別顔して悧巧に見ゆれども、其實慾の爲めには前後を忘れて盲動盲進遂に生涯を誤るものが多い。限ある能力を以て無限の慾望を充すと云ふか如きは、大海の水を一滴つゝ汲盡すと同しく到底不可能の事てある。慾望と云ひ、權勢と云ひ、名譽と云ふか如き畢竟虚榮心の投影に過きぬ。望むべからざる空想を起して獨り悶へ苦しむに至りては、自縄自縛其心事寧ろ憫むべき次第てある。

若し吾々が人生の弱點を數へ來らば、其數頗る多いことてあらふ、而も虚榮心の如きは吾々にとりて大なる弱點の一てあらふと思ふ。あるものは人生の弱點は意志の薄弱にありといふかも知れぬ。意志の薄弱も事業成功者の眼より見れば、そは慥に人生の弱點てあらふ。されども刻實して考へて見ると、吾々人間は如何なる程度まて意志の强硬を持續すべきかこれ頗る疑はしき問題てある。世の發明者や、事業家が苦心經歴の跡を考ふるに、殆と常人の及ぶべからざる意志の强硬が歴々として目の前に顯はれて來る。敢て意志の事に付て彼此と批難するてはないけれども、而し一方より考ふれば如

何に意志が強くとも、有限の知識を以て無限の宇宙に對することは全く不可能の事である。意志の薄弱を以て單に人生の弱點なりと嘲けるか如きは、恐くは人生の何物たるを知らぬことで、未た人生問題に就ては堂奥に入りたものとは云へない。吾等は不完全のものである、凡ての物よりも、弱きものである、一として自己の力によりて滿足に成し遂けたるものはない。諺に苦しい時の神頼みと云ふことがある、自己の力の不充分であることは是によりて遺憾なく證據立てられてある。吾々は意志の强硬ならざることも憂ふべきである、されど吾等は人生問題の上よりすれば、前來述べ來りたる虚榮心は吾等の弱點として大に戒慎せねばならぬ。人に對して不遜の行多き傲慢の心多きもつまり虚榮心の増長より起るのである。貪る心、權勢を望む念皆是れ虚榮心の發動に過ぎざるものである。

ある哲學者が云ひし如く最惡なる敵は胸中に住むものであると。然り吾等の敵は常に此胸中に城廓を構へて、出ては毒矢を放て人心を害し社會を紊し、入ては瞋恚の火焔を燃やしつゝ念々刻々も安靜の狀態に立ちかへることが出來ぬ。些細な事に就ても腹を立てゝ誹り嫉みなどして、胸中常に絶えまなく炎々として瞋恚の火が燃え上りて居る。表面は如何にも無事を裝ふて居るも、其實憤火山の火口を掩ふたやうなもので、何時破裂することなしとも限らぬ、誠に危險な話である。

已を知れとは聖ソクラテスの言である。人を批評し又は怨に思ふことは誰でも出來る事であるけれども、已を知りて內顧反省するに至りては最も難しといはねばならぬ。怨みを加ふる人あらば先づ吾身を顧みねばならぬ、其人を惡むが如きはこれ敵を作る基で何等の益もなき事である。欺くより欺かれたる方が罪かなくして却て不安の念が起らぬ、けれども人間は自分よりえらいものがないと高慢らしく裝ふて居るから、我慢の角を折ることは出來ぬ。惡を惡と知りつゝ已が爲めに利ありと思ふ時は、全く情慾の奴隷と化するとは、敢て辭せない。山中の賊は平け易いが心中の賊は除さかたいとは此事である、正しく自己の弱點をば弱點と感ついてゐながら自己の性慾に打勝ちて之を矯正することが難いのである、此に於て吾々はどうしても宗教の力に籍らねばならぬ。唯それ宗教の力によりて絶對の靈光を被るより仕方がないのである、有限の關門を打ち破りて無限の堂奥に進むより途がないのである。世の人稍もすれば宗教は巧に人生の弱點に乘ずるものであると强辯を弄するものあるが、そは宗教の成り立ちを知らぬ僻論である。元來吾等は弱きものであるとの自覺が出來たならば、宗教は人生の弱點に乘ずるものでなくして、却りて人生の弱點を救ふものであると云ふことが明言せらるゝことが出來る。胸中の憂惱を慰籍し、鬱結したる不平を掃ひ、よく迷雲を排してさやけき眞如の月影を望み得るは、絶

對靈妙の不可思議力に憑るより外ないのである。吾等の前途は唯一筋である、无明のやみ路に彷徨するものより見れば、右せんか、左せんかとて躊躇決しがたきも、一たび光明に照され慈悲のみ佛の手に縋がることを得ば、何の苦もなく歩武を進め、身は廓然として別乾坤に入るの思ひがするであらふ。

吾等が弱點を救ふものは宗教の力である、唯それ絶對他力の靈妙のみ、罪深き障多き吾等を救濟して呉れるのである。无碍光の利益より、威德廣大の信を以て、かならず煩惱のこほりとけ、すなはち菩提のみづとなる如く、若し吾等にして威德廣大の信仰を獲て如來の願船に乘託を得たならば、そは吾等の弱點が逆緣となつて却りて光明の雲に包まれた事を喜ばねばならぬ。法然上人のひとへに病患を得て之を樂むと仰せられた事は、今更の如く尊くきこゆるのである。

半日の閑を一夏や
蟬のこゑ
（蕪村）

雜録

村上博士の原理論に於ける形式を評す

本多文雄

上。

佛教統一論第一篇大綱論が端なくも教界の寂寞を破りしより此に二閲年、時は維れ癸卯の初夏、薫風新綠を吹て萬物生々の氣天地の間に滿てる際に當り、統一論第二篇原理論は卷頭先つ、

吾人々類は眞理の子なり、果して然らば眞理の親を求むるの心無かるべからず

てふ嚴かなる豫言者的警告の聲を載せて世に出てぬ。夕陽重擔を負ふて嶮山に向ふが如しと嘆ぜし博士は、年一年却て元氣の翁勃を來たし就て之を仰げば朝暾海に躍るの觀あり。日脚未だ午ならず、況んや夕陽をや。

其初の第一篇大綱論の出るに當て、予輩は敢て冒瀆の罪を犯し區々の言を致せり。此如きは固より二閲年の前に於て江湖無名の後進者が言論界の一隅に試み囁囁の聲たるに過ざれば、博士の一顧を値するに足らざりしと同時に、尚今天下大

方の記臆に存するものとも覺えず、從て世の視聽を惑りて強て前論法を固守するの必要もなく、予輩の如きは評論者として寧ろ頗る無責任なる位置に在りと雖も、朝三暮四の筆法は學術的良心の到底容るゝ處に非るなり。但夫れ然り、之を以ての故に予輩が論評に於ける根本的立脚地は、大綱論に對したりし時と原理論に對する時とに於て相異らざる事、猶し博士の論議に於ける根本的立脚地が兩者の場合に於て相異らざるが如し。是れ實に先進と後進とに論なく苟も一と度言論界に於て其所信を公言したる者の守らざる可らざる德義なればなり。かくして予輩が曾て大綱論に向て捧げし幾多不逞の言辭を今又た此に繰り回すの止むを得ざる者有て存す。博士幸に恕せよ。

天の降せる雨露の惠みを化して蜜を作るは花の任なり。朝に紅を訪ひ夕に紫を探り能く之を蒐集し能く之を運用する者は蜂兒の職なり。博士の博士たる天分は夫れ孰れに在るか予輩を以て見るに博士は創造の才に非ずして運用の才なり。世人が佛教に於ける新智識を以て博士に擬する者多きに拘らず、博士の思想の材料は依然として舊佛教の圈内を出ずず、而も博士が新思想を以て目せられ、佛教研究の上に一種の新天地を開拓せしやの觀あるは、其内質的思想の斬新なるに依るに非ずして、其研鑽的方法に一新面目を開きしに依る。博士の佛教に對する沒すべからざる効績は、舊套的典型以外に清新健穩なる組織的機關を設置せんとするに在る事、宛も中世紀哲學の弊根を芟除し、思索の道程に一新路を開鑿して、澎湃たる近世實驗哲學の思潮を導きしベーコンの其れにも似たらんか。ベーコンが論議を遺る始めに於て、必ず先づ偏見、先入の産物たる「アイドラ」を捨てよと言ふが如く、大綱論以來統一論を一貫せる大主張は、一に公平なる佛教教理の研究にして、また之を陶冶すべき組織的新機關の設立なり。「實驗哲學の文」と讃へられしベーコン其人が、眞理研究の前には學權教權の威嚴を認めず、拘文泥字の解釋を擲て直ちに眞實體に突入せよと說き、個人的辟案を避けて研鞫的攻究を唱道し人生宇宙に對する神秘的見解を斥けし其勇氣、其態度、其學風、さながら移して以て博士の上に擬し得べきにあらずや。於此乎博士の統一論は正に是れ一の『ノーヴァム、オルガニューム』（Novum organum）なると同時に統一論に於て最も重要視すべき者は、其内容的資料に非ずして、之を按排し之を組織し之を說明する處の方式即ち博士の所謂形式是れなりとす

教判と形式の學究的佛徒は此に言ふの必要なし。其一代の龍象、教界の巨匠を以て目せられし者すら、先づ一種の先入と偏見とを抱て然る後ち論評を佛教の上に致さゞる者殆んと稀なり。佛教學界に永く此弊風を薫致せし者は、實に彼の教判なる者與て力ありと謂ふべし。一種の見地より佛教の全面に現はれたる一切の教理を剖解評價せし者之を教判とせば、教判固より不可なる無し而も其所謂一種の見地なる者は所謂一種の先入にして、評價の目的とする處は、自己の取る所の教義をして最上の位地に措かしめんとするに在りとせば、見地や既に偏、目的や既に陋、縱令然らざる者とするも公眼冷腦の門外者より言はしむれば、教判なる者は必然的推進の關係なき瞑々の思想の羅列にして、思想開發の歷程を教ゆる者として畢竟無意義たるに近しとせん。三時教といひ五時八教といひ、五教十宗といひ十住心といひ、二双四重といひ、唯名論的羅列と「スコラ」的分類とを唯一の武器となせる古來の教判より、若し其れ數字を除却し去れば、贏ち得る處果して何等の意義ぞ。

古來の教判の値價が、客觀史事實史として全く零なる事は何人も認むる處、又た教判なる者が苟も思想の開發推進に於ける自然的徑路を言ひ顯すべき「史」の意義を飲き若くは之に反する時は、其が主觀史思想史としての價値も亦た零なり。予輩は疑ふ、古來釋家の巨匠に依て提供せられたる幾多の教判は、果して能く完全に「史」の意義を語り得べきやを。

博士の宣言するが如く原理論は一部の思想史なり。原理論は博士が從來の教判に甘せず、別に一機軸を出して、最近の學術思想が肯定する處の方法に依り、組織せらるべく計畫せられたる教判なり從來の教判が三時といひ五時といひ、時代の觀念を寓顯せる者あるに拘らず、全然初めより事實史を疎外して作られたると同しく、博士の教判も亦た純思想史に依りて事實史に依らずと言へり。（一五——二〇）而して予輩は原理論一部の教判を組織する處の形式の如何を穿鑿する前に事實史及思想史に對する博士の見解に就て一言を費すの必要を見る。

論理的に論證せられたる思想開發の歷程と、之が事實となりて世界の表面に現はれし蹤跡とか、何れの時代、何れの處に於ても全然一致する能ざるは予輩亦た之をを認む、然れども全然事實史的根據に賴らざる單獨なる思想史が思想開發の方針、歷程を適當に說明するに堪ゆべく編製せられ得べき者なりや否やは蓋し一大疑問なり。吾人が從來の教判に慊焉たるの所以は主として此點に在り。

博士の思想史に於て佛教最後の産物とせられたる淨土教の如きは、其思想早く既に起信以前に在て印度の心靈界に一種の勢力を占め得たりし事は事實史の證する處なり。淨土教の樞軸たる人格者に對する信仰の觀念の如きは、「アタルヴァー吠陀の遠き時代に於て既に存在せりといふに非ずや。淨土教眞言宗日蓮宗に於ける稱名眞言稱題の如き觀念の包芽は遠き「リグ」吠陀の古代に在て「ナモハ」（Namah）なる祈禱的言語の崇拜中に現はれたりとも言ひ得べきに非ずや。密教思想に於ける呪法、禪宗に於ける座禪の觀念の如き、ろれ〳〵佛教以前に於て其發生の蹤跡を認め得べきに非ずや。凡此等の觀念の生起的關係は、博士の所謂思想史に於ては如何にして將た如何なる位地に於て說明せらるべき者なるや。若し說明し得たりとするも、思想史上の事實と事實史上の事實とは爲めに天地雲壤の相違を來たし、彼れと此れとは全く調和の道を絶つに至るべし。かくの如くして予輩は博士の宣言する如く思想史に依れる原理論及佛陀論と、事實史に依れる教系論とは將來に於て如何に調和せられて統一的研究の目的に副ふ事を得べきやを怪む。

形式論

いざ予輩をして再び論議の主題に還らしめよ、凡事實史の確證に依て擔保せられざる思想史は、豫め何等かの理想的形式を倩ひ來て、之に依て個々の思

想を按排するの擧に出でざるべからず。之を以て教判には必ず形式あるを要す。予輩を以て見るに古來の教判が相次で襲踏し來りし所の者は即ち直線的分割の形式是れなり。

由來思想なる者は停止性の者に非ずして移動性の者なり。水の如し、能く動けばなり。玉の如し、能く轉ずればなり。一泓潭碧の湖心纔かに涓滴の動く者あれば、千波萬浪層々疊起、甲は乙を産み、乙は丙を誘らし前に連り後に結び、上を承け下を起し、相互勾聯、獨生獨死する能はざる底の者は實に思想なる者の特性ならずや。之を物體運動の法則に鑑み、之を天體運行の規律に徵するも、運行的作用は直線的坦道の上に於てせずして常に曲線的規道の上に於てす。而も思想の運行、思想の推進、思想の滑轉、換言すれば思想の自然的開發を疎外せる從來の教判は、前後連渉せる思想の關係を割斷して之を直線的に分列したる者を謂ひ得べきに非ずや。是れ予輩が從來の教判の形式を以て直線的分割とする所以なり。思想の開發は己に直線的に非ず、之を以ての故に曲線的なるを要す。己に分割的に非ず、之を以ての故に推進的なるを要す。思想相互の關係を案するに、後思想は前思想に對して獨立するに非ずして、寧ろ其推進せられたる狀態なればなり。一言するに思想の自然的開發は曲線的に前方に推進するの形式を以て最も能く標章せらるゝを得べし。此點に於て予輩は博士が從來の教判に於ける直線的分割の形式を斥けて、曲線的推進の形式を取り、以て佛教思想開發の蹤跡を討ねんとするの効績を頌せんと欲す。博士の取りし曲線的推進の形式とは何ぞ、曰所謂周圍循環の形式是れなり。然れども周圍循環の形式は全然曲線的推進の形式と一致する者に非ず。唯曲線的推進の意義を言ひ顯すに於て、周圍循環の形式は直線分割の形式よりもヨリ多く適當なりと言ふに在るのみ。予輩は原理論に於ける博士の思索法が幾多の成功を有するを認む、而も之れと同時に又た幾多の不成功をも有するを認めざるを得ず。而して其成功は周圍循環の形式と曲線推進の意義とが相一致する點に於て存し、其不成功は其相一致せざる點に於て存す。予輩は先づ如此く立脚の地點を定め然る後徐ろに博士の形式に對する論評に移らんと欲す。

（未完）

故藤村操君の手簡

南木生

我が心友藤村操君、宇宙人生の眞意義を究明せんとし、深思廣察、終に『不可解』の結論を得て、身を懸崖百丈の華嚴瀑下に投じ、英魂長へに無何有鄉裏に飯入し終んぬ。世論爲に囂然たり。

或は曰く、これ一種の虚榮心に出てたるのみ、或は曰く、これ弱行薄志の徒のみ、或は曰く、借金の始末に窮したるによるのみと、而してその最も突飛なる評論に至りては曰く、彼の投瀑、恐らくは事實にあらずして、自殺を粧うて窃に山に入れるなるべしと、凡そこれ等紛々たる世の毀譽や、固より多く意を用ふるに足らずと雖も、堂々たる學者先輩にして尙種々の臆說を公衆面前に披陳し、死者に侮辱を加ふるものあるに至りては、その輕卒無情なる、誠に沙汰の限りと云ふべし。彼等は以爲、藤村操死す、その死するや、哲學問題に關する煩悶より出でたるの故を以て、世評一時に高し、この故に世の青年者中、悲なる虚榮心に驅らるゝの徒、續々これに摸倣して自殺するものあらん、これ實に由々しき大事なり宜しく匡救せざるべからずと、乃曰く、自殺はその場合の如何に拘らず斷じて罪惡なり、彼の藤村なるものは、年齡漸く十八歲の少年のみ、焉んぞ能く深奥なる哲學問題を解せんや、願ふに彼が死因には何等か暗黑の部分ありて伏在せざるべからずと、ア、これ何等の輕忽ぞや。自殺の罪惡なる、何人も異議なし、只これを云はんが爲に、事實の如何をも探究するに及ばずして、恣に自殺者の死因を臆測し、以て無辜の死者に無實の汚名を加ふるの要何くにかある、これをして世の職々者流の言ならしめば、固より言ふを須ゐずと雖も、堂々たる大家先生にこれあるに至りては、余、故人の心友として默視するに忍びず。果然流說は二三の新聞によりて放たれたり、曰く、藤村操の死は失戀に出でたりと、以て學者輩の所謂『暗黑の部面』を發き得たりとなして得々たり。而して其事實たる、一高の學生間にありてすら、誰人の仕業とも想像しえずてふ菊松女の墓事件に、菊池文相の令孃、那珂博士など、些の連絡もなき事柄を無理に結び付けて、尤もらしく組み上げたる揑造說に過ぎず、斯の如きは、彼の平生を知れるものより見れば、誠に一笑にだに値せずと雖も、これを知らざるもの、或は以て眞なりとし、從て彼が最後の行動を卑陋なりと誤解するものなきを保せず、これ余が特に故人の爲に辨なきを得ざる所以なり。』

夫、人を評するの難きは、評して肯綮に中ることの難きなり、特に彼に親密なるものにありて然りとなす。この故に余は、余の親密を以て彼を評隲し辯護するの失當なるべきを思ひ、爰に彼自身の書信を公にして、彼が煩悶の如何に經過したりしかを髣髴せしむる爲、彼をして彼自身を語らしめんとす。要は彼の自殺が、眞個宇宙人生の問題の解決に煩悶してのの極なりし事を明にし、世人をして、事實の眞相を諒知するの材料を得て、一は以て彼に對する誤解を解き、一は以て公平なる批判をなすの資となさしめんとするに外ならず。若夫、彼の懷疑煩悶が、果して健全なるものなりや否や、そが果して死の外に解決の道なしとすべしや否やの如きに至りては、余の爰に說くを欲せざる所、一に大方讀者の批判に委せんとす。只彼が斯の問題に對するや、極めて深刻に、極めて切實に、極めて眞摯にして、終にこの怨を懷いて煩悶死を決するに至りたる迄に熱實なりしを諒とし置かれんことを望むのみ。

＊　＊　＊　＊

卅五年十月十七日。

（前略）、卿の書狀の着いた日には丁度行軍に行つた、十五日の午後には河口より犬吠岬邊を散歩して見た、中々に景色よき所もあつた、……此邊旅行してをる中にも各人種々と考を異にしてをるのが面白い……此間に吾人哲學科生徒はNature. の偉大に驚き、Creator. の魔力に嘆ずるのである。燈臺守は熱心なる Christian. であるそうである、成る程此燈臺に住して常に不可思議の自然に接するもの、自然宗教心

起さゞるを得ないのであらう。（中略）、僕此頃又た運動がいやになつて來たドウモ悲觀に陷り易くて困る、之れは一は信仰を有せざるによる事であらうし、一は又哲學智識の足らざるを爲めであらう、又一つは現實の俗務がウルサイので、又た舊思想の親戚間の感情のメンドウ臭ひ等の事より來たのであらう、ドウモ相變らずの煩悶子であつて困る、君よ、愛を余するならば希くば慰籍を與へよ。（中略）、松島に Bont. を浮ぶるとの事、墨堤より數等增してあらう、僕も松島は一度見たよ、俗臭の少ないのはヤ、可とするに足る、東都では多を望まぬ俗臭なきを以て足れりとするのであるが、到處紛々たる銅臭、いやてたまらない、松島は六月の帝文に晩翠の詩があつた、一寸壯んな文字であつたネ。（下略）。

◎

卅五年十一月一日。

（前略）、先づ兄の第一の忠告、即ち徒らに悲觀に陷るの非を諭された事、喜んで受ける、又深く之をデナィすべき理由なきを信ずる、以來大に注意修養して、貴卿の好意を空しうせざらん事を勤めよ！（中略）、僕は元來ポリシーとかミーンズとか云ふ事が嫌ひで、ナンでも赤心を人の腹中に置かん事を務めて居るので、其代り人からも何も遠慮なしに仕向けられん事を望むで居る、殊に良友の忠告の如きは最も希望し喜んで受くる所である、此後も又度々願ひます、（中略）、君よ、願はくは僕の此問題に解釋を與へよ、『理想と現實との衝突を避くる方法如何』、此問題は幼稚の僕の差しあたり困つて居る所である、（下略）。

◎

卅五年十二月十六日。

赤心を以て君に云ふが、今や僕の享け得る慰籍の方法は唯二途に過ぎない、一は我慈母の渾身の愛であつて、他は即ち貴兄よりの細字の端書である、嗚呼心事の如何なる變化に係らず、永久不變にめてたいものは此愛に外ならないと思ふ、僕の端書で御推察であらうが、僕は此頃懷疑に陷つて居るのである、僕の腦は今や大破壞を行つて居るのである、思ふに此時代は最も危き最もッ、シムべき時代であるから、大に修養に注意して居る、此間も桑木博士を訪ふてかなり知識を得て來た、（中略）、此間の君の忠言で、漸く自己の低きを稍や悟つた、ソクラテスの所謂「我は只我が知らざることを知つた」と云ふ程には行くまいが、少くとも我が知らざることを知らん事を努めて居るだけは事實である、僕には君以外に斯學上の先輩を知らんのであるから、君と別れたのは實は此上もない苦痛であつた、僕を愛する兄と、敎へ導く師とを同時に先つたのであるから實にガッカリした、であるが幸ひに文字なる方便があるので思想感情の幾分を傳ふる事を得るのはせめてもの幸ひである。僕は近頃如何なる書を讀むべきが如何なる順序に讀むべきかに迷ふて居るのであるから、暇もなからうが何日か君の知れる範圍に於て君の考へを知らせてくれ給へ。此間「即與詩人」を一寸のぞいて非常に面白いと思つた、（下略）。

◎

卅五年十二月二十五日。

嗚呼如何したら宜いであらうか、僕は日々に益々自己の弱きを嘆ぜざるを得ない、此間は俗世間が氣に入らぬなどゝッブやいたが、昨今は全く自分がいやでしかたがない、僕は今や哲學的懷疑と、倫理的煩悶とが同時に來襲して來たので、其苦痛は到底言語筆紙の表はし得るところでない、差當り僕は自分の意力の甚だ薄弱なることを認めて苦悶に堪へぬのである、（中略）、此間村上博士の講演に聽きて、フト思ひ立つて、曾參の三省に眞似て、Franklin. のやつた樣な表を作り、寢前に一日の行爲を省んと欲したのであるが、それさへ、就褥前のネムィ時であるので、途中で面倒臭くなつてやめてしまつたり、甚しきは忘れてしまつて床の中で氣がついても、モ一度起きて試みるのがいやで其儘に眠つてしまつた事もあつた、考へて見ると本當にィヤになつてしまう、（中略）僕の懷疑の內容は『凡て』の一言が盡してをると思ふ、空間を疑ひ時間を疑ひ、道義を疑ひ（此道義倫理を疑ふ事は大に僕の意力を弱からしめ、處世の針路を迷はしむることであらうと思るゝけれども、ドウしても自ら解決を得ずして盲從することは出來ぬので）、審美を疑ひ、實在を疑つて居るのである、所謂理法なるものをも輕々しく信ぜられんのである、と云ふことを一言して證いて君の敎導を待つのである。（中略）、昨日高山博士が愈々他界の鬼となつた、君よ、兎に角に彼は偉人だらう！君！病的かも知れぬ、奇矯かも知れぬが、何にせよ其 Influence. は大きかつたね！死なれと見ると益々惜しい樣に思はるゝ（下略）。

◎

卅六年一月三日。

君！此度の君の手紙は實に嬉しかつた、四五度も通讀して見たよ！

先づ君に二つ喜ぶべき報告をなし得るのは僕の最も喜ぶ所である、と云ふのは、一つは僕の思想が、此前に手紙を出したときよりは餘程健康に向いて來たと云ふ事、一つは僕に滿足慰籍を與ふるものが一つ殖えた事、即ち前には僕の感情の對象が殆んど人生に限られて居つた、即ち人格的（ちと語がオカシィが）の愛（其他）が僕の感情に滿足を與ふる殆んど凡てゞあつたのか、此間旅行をして來た（一泊で三浦半島を一週）のちは、僕の感情の對象に自然なる大なるものが入つて來た、換言すれば自然の美（僕は常に思ふに、自然に於ける美なるものは、人生に於ては即ち愛なるものに當るかと思つて居る、無論此種の事は美學を研究すれば明なることであらうが、マア質問をするのである）なるものが、僕の感情に多大に慰籍を與ふるに至つたと云ふ事である。（下略）。

耶蘇の正傳ね（Historical.な）、邦語じやあるまいかね？（下略）。

◎

卅六年一月廿九日。

（前略）、『ソモラビリヤ』を讀んで大に感じた、所がサッパリ實行が出來ないのは汗顏の至りである、グラドユエーションによりて着々其功を收めて御目に掛けるつもりである、君の薦舉は大に其時を得て居つた樣である、何となれば、僕は今や高上の哲理等よりは寧ろ實踐倫理に於て强力なる皷吹者を

望んで居るのであるから、此ソクラテースの如き實踐の偉人は僕の要求に最も當つて居るのである。然しながら僕思ふに親しく接しなければ如何なる偉人とても到底究竟の感化を能ふることは不可能である、て僕はソクラテースよりは寧ろ君南木君に望む所甚だ多いのである、イムプレッションを與ふる唯一の鎖は、プラトニックのラヴである、而して此ラヴや到底タイムを異にした人物間に求め得られない、假令クセノフォンの筆如何に巧なりとも、肉体的に接近したる親友の如くにソクラテースを我に近からしむることは出來ぬのである

（中略）、年齢の爲めてもあらうか此頃大に感情的に成つて、理屈張つた事がいやになつた、こんな事では大變だと思つて能ふ限り理性の光を闡明しやうと思つて居るが中々六ケしいしかし、現時の道學先生や學究の樣に、頭が冷かに堅まつて石の樣に成るのも賞めた事でもないと思つて自ら辯護してゐる、デ文學書の机上にあるものは、デートンの註のシエークスピーアの『ハムレット』、それから早稲田の巢林子撰註位のものである、……ドウも漢文の力がなくて佛書が讀みたくても讀めんで困る（下略）。

◎

卅六年二月十八日

（前略）、當地例年になき大雪あり、其後も亦降雪あり、又明日あたりも降りそうな空模樣である、僕の心も此空模樣に似たるかな、何時もうらゝかなる東京の春も、此年は疑ひてふ大雪に襲はれ、又煩惱てふ嵐吹きて苦痛絶ゆるいとまなし、今日は學窓に友を避けてハーミットを氣取り、昨は惡俗とノンセンスの雜談に時を浪費する等千變万化一律の以て準とすべきなき事近日の天氣に彷彿たり。（下略）。

◎

卅六年三月十九日。

（前略）、君は相變らず幸福であらうが、僕は益々苦悶せねばならぬ樣運命を定められてをる、何だか何もかも少しも譯がわからぬのて書かうと思ふても書く事もなく、言はんにも言い方がない、あゝ今日は非常に君が慕はしい、君に會ひたくて堪らない、今日珍らしく（僕此頃は學校のレッスンを全く棄てゝ居つた）ゴールドスミスの『ヴィカー』を讀んて、彼の娘オリヴィアが惡人ソーンヒルにあざむかれて、非常に墮落して後旅舍でヴィカーに會つて罪を白狀した所を讀んて同情に堪えなかつた。

（中略）、此程漢詩を讀んて見やうと思つて、李太白集など机に置いてある、又露伴の血紅星（尾花集中）を讀んて大に趣味を感じた。

（註）、血紅星は皆非居士てふ奇人を描出したる一篇の夢想小說にして、其冒頭、古今の偉人、人生、道義、倫常、有らゆるものを罵倒し盡してこれ等一切を否定せるところ、特に彼れの嬉しく思へる黠なりと見ゐ、これに朱點を施しあり、且、終りに皆非月世界に遊び、大醉亂舞の極、月宮より墜落して血紅の星となると云ふ趣向あり、彼れ、この書を紀念品として余に遺すに當り書して曰く、『我もこの血紅の星たらん』と。

◎

卅六年三月廿三日。

草不謝榮於春風。木不怨落於秋天。誰揮鞭策驅四運。萬物興歇皆自然。

これ僕の愛吟。君以て如何となす。

◎

卅六年四月二日

（前略）、松島灣上の快漕、まことに都人士の想像し得ない面白味あらう、僕には相變らず一個の偏見があつて（君にトけらるゝ事であらう）現在の運動家連中と俱にするのがいやであつて、其爲めに体育がどうも怠慢になつて困るのである、（中略）。

僕は相變らず懷疑にあつて不愉快である、然るに稍もすれば眞の懷疑者の取るべき方法を離れて危險な我儘勝手な獨斷に陷り、所謂 Pessimist. に近き思想の傾きがあつて困る、明治の小說では露伴の血紅星が大好きである。（下略）。

◎

卅六年五月九日。

僕其後變つた事もなく一家團欒身体健康、先づ客觀的には至つて幸福だと知り給へ、扨而主觀の方面は日に益々非である、第二學期には僕の生活は全く煩悶と苦痛とて盡して勉强は少しもせず、……運動は絶對的に大反對、其最大の原因は、運動家と云ふ動物と一所になるのがいやだと云ふ偏狹心である音樂は不器用な僕には迚も御手にあはず、依て何の慰籍もなく……何もかもいやていやて仕方がないと云ふ有樣てある此間にすきなものは、永刼の不變の自然と云ふ奴てある、机の上には君の眞似をして山ぶきや躑躅などを生けて置いてある、ウォーヅウォースの詩に

Nature did never betray the heart that loves her.

と云ふ句があるが、これが僕の唯一の慰めてある、併し君可笑いのてある、毎日此通りかと云ふに決してそうてない、時には非常に大言壯語し、或は大に羯落となり、又は樂天家となる事もあれば、又は梅月あたりへ同じやうな朋友と押し掛けて菓子に不平をいやす事ある、盛に散步する事もあるが、一々書いたところてくだらないから省略するが、そこは推察して呉れ給へ。（下略）。

◎

卅六年五月廿一日。投身の前夜日光より（書き置き）。

君が數多度の熱き情けのさとしの文の甲斐もなく、意氣地なくも空しく亡ずる此身を憐れみ給へ。

明日華嚴の瀧に
入水せむずる

五月二十一日　　藤村操

南木兄

原稿遺失の記

一記者

世の中の事は何が何だやらさつぱり分別がつかぬ、一寸さきの事は丸て盲目同樣である、一日のことを考へても朝に雨が降りて昼には晴れ、午前は晴れても午後に曇りしともある、或は思はぬ來客に接する事もあり、飛でもなき災難に臨む事もありて、千變萬化走馬燈のやうである、筆が一日のこゝてさへ斯の如くである、一生を通りて永い〳〵其間には笑ふべき事、悲むべきこと、喜ふべきこと

怒るべきことの數々あるべきはもとより免れざる所、かく思ひつゝ突然不虛の災難にかゝると、吾なから耻かしきほど狼狽して殆ど夢のやうな事がある、こたび原稿遺失の件も其一である。

八日發行日であるけれども近角兄を始めとし僕に至るまでそれ〳〵用事繁くしてやつと原稿を取揃へたのが十日の日であつた、此日丁度近角兄より羽前の尾花澤客舍に於て百忙中筆を遶らして、清澤師の一生を三期に分ちて描かれた處の面も感情の濃い熱涙の迸る長い〳〵大論文がとゝいた、さやう原稿紙二十枚もあつたであらふ、巡回中何かにつけ多忙の中からこんな長い論文が送くつて來れまいと思ふてゐたが、それが實に案外でうれしかつた、一讀再讀までして、句讀を典し、假名を附し尚外の分も同樣に整頓し、夜分遲くまでかかり明朝印刷所に送るべき手筈を定めおいた、此日は先つ何事もなかつた、

あくれば十一日、空は曇りてあつたけれども格別のこともなかつた、微風動いて清くすゞしかつた、和田兄先つ來り、待山兄次て見えた、やがて二兄が去ると間もなく本會の小僧に政教時報の原稿を一括して美土代町の活版所即ち三光堂に持ち行くべきことを命じた、それが正に午に近かつた、二時三時と刻々と時間がうつりても小僧の姿が見えぬ、いかにも不思議にたえぬ、丁度四時と云ふ時の聲をきいた時顏色青ざめ流汗珠をなしてすこ〳〵と歸りて來た、いかにも勢のなさうな態度であつた、そして聞きとれぬ低き口調でおゝしました、〳〵と繰返して云ふのみ、少しも其要領を得ながつた、とう〳〵原稿おゝした事がわかつた、うれをきいた時の僕は全く宙下られなかつた、近角兄の文章やら、和田兄の原稿などが、あり〳〵と目の前にあらはれてどうしても非實であるとは思へない再三再四念を押して尋ねて見た、依然としておゝしましたと云ふ五文字は正確にあらはれて來る斗りて、初めの中は丸て夢のやうであつた、暫くするといかにも殘念であるとの思ひがむら〳〵と胸中に通き上りた、丁度自身の財產でも失ふた氣持がした、ばては發行日遲くれた上にこんな失策がありては、讀者諸君に對して いかにも氣の毒である、うれのみならず多くの諸氏が骨を折りて精神をこめてかいて下さつた玉稿をむざ〳〵紅塵の中に埋沒してはいかにも氣の毒にたえられぬ感想がいろ〳〵と浮び來りて、如何に處置すべき事の考が出ながつた、小僧を叱り飛した處で今更原稿の無事にもとつて來る譯はなし、殊におゝした小僧の身になりて見ると僕よりも一倍心配して居るやうである、兎もあれ小僧よりおゝした途筋の心當をきくと、お茶の水附近までたしかに手にあつたが、美土代町の電年會の前にいたる頃風呂敷包みがとけかゝりて居つたから、中を改めて見ることもう原稿はもぬけのからであつたとの事である、今は一刻も猶豫する時でないと思ひ、早速腕車を飛ばして本郷局にゆき新潟に滯在中なる近角兄に電報を發して原稿遺失の事を報ず直に警察署に至りては届出をなした、かゝりの一人が見て如何にも氣の毒げにあゝ政教時報ですか、それは殘念でありませうと云はれたが思はぬ處に思はぬ同情者を得て、愁なからぬ慰藉を得たるこゝちがした、從來の繁きお茶の水の邊に出た頃はいつのまにか空は蔭りなく晴れ輝く夕日に浴びせられて、左に高師を眺めつゝ一直線に橋を渡りて交番所へと駈け付原稿の事を尋ねだか一向知らぬとの事であつた、力を落しながら一礼しつゝ新小川町の交番にきいたが一向に冷淡であつた、去りて神田警察の門をくゞつて受附掛へ届け出て、再びお茶の水橋を渡りて元富士町を横切り、大學の裏門を過きて不忍の端へ出たが、最早夕日が落ちて暮の色が蒼みがゝつた、上野の鐘は水面を渡りてきこえ悠々たる水禽の浮きつ沈みつ餘念なく群れゐるを見ては何となく氣持が爽かであつた、すぐと池山君を訪ふたけれどもあやにく不在であつた、其儘霧川町へ歸へた、歸來幾度考へてもどうしても原稿が失ふたと思へぬ、思へぬけれども事實なくなつたから失ふたに違ひない、よく人の云ふ話だが愛兒を亡ふた時は、どうしても一時は死んだものと思へぬとの事であるが、まるで其通りの氣持であらうと思はれた、僕が政教時報には第一號發刊する時より携ぼりて居るが、今まで一度もこんな失策をやつた事がない、うれは其當である、原稿の取扱は大切にして一度も郵筒に附した事はないのである、いつても使を以て活版處に送くるのである、この度は使であつたけれども所謂不虛の天災でもあらふ、五ヶ年間に一度位はありろうなものとおもへば聊か慰める事が出來た、この夜浩々洞の諸君は訪問された過失をあきらめ給へとて例のあきちゃん主人を說いてゆかれた、次て桑門君池山君訪はれた、色々の話をして十一時歸へられた、近角兄より返電ばなし、再稿を企て、やうか、どうしやうかを思ひ、心に問ひつ答へつ、やう〳〵眠におちた。（七月十二日朝記す）

文苑

夏季雜咏

若楓橋錢を取る小家かな　句佛

交へ撞つ鐘や若葉の寺二軒

石菖の素人畫にもかゝれけり

折り得たる柘榴に蛛のかゝれ顏

葛水の腹にちめたし病上り

清風池をめぐつて荷香月下に動きけり

律院の獅子吼に開く牡丹かな

牡丹剪つて詩箋に文を選ひけり

帷子に墨をあやまつ醉畫かな

夏季十句

人足の墓地に焚火や栗の花　白山

葛水や何嗜みの世捨人

溫泉戻りの鮎買ふ茶屋も橋の傍

手燭して蝙蝠をとる岩屋かな

打落ち螢が見ねず草の中

曉の地藏ヶ森や閑古鳥

傘さして橋に易者や五月雨

夏草に地藏倒れて路の傍

汐風や磯の祠の散松葉

禪僧に角ふり起せ蝸牛

廢寺の賦

露生

流隔てゝ樵夫呼ばふ

木蔭も深き溪に入り

高き聖僧の寺訪へば

朽ちてわびしき柴の戸の

堅く白日に鎖されて

雲の流れも靜かなり

かの白雲の涼しげに

秋のあしたに浮び出で

夕のやどり知らぬごと

げに三界に家もなく

旅より旅に流轉れては

衣手寒き聖僧の
風の行方を誰か知る

高き聖僧は去りにけり
秋の入日の淋しげに
落ちて破れし壁這へば
萩に千虫のすだきつゝ
月は清らに照るらめど
草蘆あしたの主もなし

白虹

うしほ

朝雲を捲き去るうしほ榮えありとこゝに生命を詩に托しき

酒くみていざ酔ひゆかめ歌枕我があめつちに朝の鐘なる

飄遊の行く手ぞうれし春の朝の霞にひろき下總の田野

淺き瀬の白き玉石朝な〳〵天つみ星の光やどすか

野よ山よ雲の廣きを夢みんに運命か哀れ籠のほほじろ

曉に山寺出でゝ橋に立てば白き横雲西に流るゝ

夕陽の雲を描くと絹のべて繪具溶かせば白き鳩飛ぶ

海見ると磯の巖に立つ君の瞳に映る春の新星

ふるあとを朝たつ旅の檜笠ゆくて國原狹霧ふかくも

ひやゝかに雲は流るゝ薄月夜椎の葉がくれ栗鼠のなく

涙まろべ汐いや湧けこゝに吾煩悶の生命今ぞ投げてん

山寺の柿の花散る裏戸口うてぞ答へず閉古鳥なく

麥笛

牧童

嬰兒にうまき眠を賜ふ神の吾に
平和などをしむらん

光明なき黄泉にもまがふ世にうみぬダンテ生れよ
わが秋津島

眠りより地の子さまし警誡の聲おごそかに
なく沓乎鳥

地に倦まば歸りも來よと御父の架けます
橋か夕暮の虹

はかなくも親この花の萎れなば弱き蝴蝶の
いづち行くらん

君にとて秘めし寶の胸にうせて哀悼の歌に
我れ老へむかも

浮橋や夢にたゝずむ岐れ路いづれ光明の
路にかあるらん

渴きては泉もとむる小羊の弱きに
にたる吾なりけらし

さらばよし此の身こゝにかとゞまらん
空しき夢を追ふに倦みぬる

聖き子に血汐もとむる神の苦荆の苦
とはに忍ばん

逝く水は長く流れてはかなしや蝶の夢路の
短かうもあるかな

白雲の風に流るゝ末遠み風より早し
吾が世のいのち

追憶の賦

白玉生

夢の世を夢に別るゝわりなしや兄とも知らず
弟とも知らず

世を知らず逝きし汝が身そはよしや兄に似もせば幸薄からん

頭ふ手になが石碑の文字かきて天を仰いで吾れたゞに泣く

石の如くなれが墓場に行めばやさし妹は花手向けつる

さゝやかの天の使の翼にのりて魂よ去りしか白玉の樓

やがて來むよし淋しくもしばし待て十年ながしと母のたまひぬ

朽ちざらめ黄金の札に名を彫りてなれが襟にゞ掛けて埋めき

（去年の夏わが弟齢二つにて逝せぬ）

新刊紹介

新佛教徒同志會編
◉將來之宗教

小石川原町　鷄聲堂

本書は新佛教徒の諸氏が現時教界第一流の諸名家を訪問して、將來の宗教に就て平素抱懷せる意見を叩いて、一たび之を新佛教誌上に掲げしものにして、其佛教徒と耶蘇教たるを問はず、所謂教界の名士を悉く網羅して餘す所なし、名を列ぬるもの曰く、釋雲照氏、曰く、元良勇次郎氏、曰く、海老名彈正氏、曰く、佐治實然氏、曰く、島地默雷氏、曰く、内村鑑三氏等の三十二名亦多からずとせずや、一たび本書を繙けば是等諸大家の風丰を親ひ、性行を知り、氣燄なる高論卓說、身親しく之を聽くの思あらしむ、十人十色所說一ならざる點に於て吾等は其間に尠なからぬ興味を惹くものなり、試に雲照律師談話の一節を紹介すべし

耶蘇教では二万年以前に神が此の世界を造つたと云ふ、然るに學問上では地球上には六万年も以前の石があると云ふ、二万年以前に出來た地球に六万年以前の石があると云ふのは、丁度息子が六十で親が二十歳だと云ふ樣なわけでまこと に理窟が合はむ、こんな理窟の合はん宗旨だによつて宗教と學問とは違ふ、信と智とは別だと言はればならんわけになつて來て居る、然しそれは理窟に合はん耶蘇教の上には必要なことであつて、道理を盡した佛教の上には用のないことぢや、西洋で分けることが流行るで日本でも何でもかでも二つに分ければならんといふことはない、佛教は信と智と離れない道理の上に成り立つて居るによつて、少しも之を二つにする必要はない、世の中では雲照が目白蓮で惜佛教の迷信を說いて居るといふものがあるそうだが、迷信でも何でもない、道理を盡した教だ、これが道理を盡さぬといふならば、向ふからさへやつてくれば十日でも廿日でも道理の盡るまで論ずる、向ふから來ないからこそ仕方がない何も目白蓮で一人ですましてるのではない、云云

雲照師の面目歴々として見るが如し、以て其他を知るべき也、盡し難よく到るものにあらずんば焉ぞ如此なるを得んや、一言一語と雖苟もせざる所、吾人は深く記者の勞を謝すると共に、江湖に向て本書の一讀なすゝめんと欲する者也。殊に其人の肖像と筆跡とを挿入したるを以て、一段の趣味深きを覺ゆ。（定價七拾錢）

高橋鐵太郎著
◉海洋審美論

本郷文明堂

題して海洋審美論と云ふ第一章染筆の辭、第二章海國としての日本、第三章國民の海事思想、第四章海と文明、第五章海と文學、第六章海の研究、第七章海洋文學を振作すべし、第八章英國と海洋文學、第九章海洋遠征の志を養ふべし、第十章海上に於ける我祖先の勵業、第十一章洗筆辭の十一章より成るものにして、海洋に就て殆と餘蘊なく研究したるものにして、所論豪放にして多く奇拔也、全篇を通して每章古人今人の詩歌を擧げ來りて讀むものをして文學的趣味にあかしむ、本書の要旨は大に海事思想を鼓吹するを以て著者の本領なるが如し、著者曰く苟も海事思想なき國民は進取するを得ざるの國民なり、國民の海事思想を養ふと否とは直に國家の興亡に關するものなりと、以て著者の意のある所知るべき也、

橋惠勝著
◉淨土教發達史論

小石川鷄聲堂

本書は始めに教義の基礎として涅槃論、解脫論、理想論を説明し來りて佛教の大綱を示し、以て淨土教發達上の重要なる問題なりとし、更に進んで淨土教を第一期第二期に大別し其第一期に於て方等般若等の諸經が編集の來歴分明なるもの極めて尠なく、内容は尊重すべきも歴史的價値に至りては容易に認め難し、されば經典の内容に史的光明を投射すること最も必要なることより佛在世の集異門足論法蘊足論、施設足論の三論に就て開陳する所あり、以下階經に就て淨土教發達に就て博引考證頗る力を盡されたり、第二期に來りては馬鳴、僧伽羅刹、龍樹、世親等の著書に就て詳細なる論評を下し、以て淨土教發展の行路を指導されたるは著者の勞多とすべき也、而して當に淨土教發展其者を知るのみならず、之によりて其教義の何物たるかを知らに於て闡し欠くべからざるの良書也。（定價六十錢）

赤司繁太郎著
◉理想の宗教

名古屋世光社

基督教見地より日本近世宗教思想の變遷より說き起して理想教は基督教を措いて他に需むる必要なきことを說きたる小册子なり、基督信者の一讀すべきものなり。（定價十錢）

加藤咄堂著
◉應用說教學

麻布森江書店

本書は說教の要素、組織、修辭等に就て秩序正しく記述したるものにして、說教者の參考として欠くべからざるもの也。

安部正人著
◉三舟秘訣

神田有斐閣

三舟とは幕末の偉人鉄舟、泥舟、海舟に就て逸話を記述したるもの、よく三舟の風采、面目、性行を抽きて紙上に躍るの觀あり、殊に趣味を感するものは三舟各々禪機を悟了したるにあり、されば本書は世の青年の爲め好個の修養の羅針盤たり、讀過一番清風波下に湧くの思ひをなす。

安部磯雄著
◉社會主義論

神田社會主義圖書部

曾て二六新報紙上に掲げて讀書界の歡迎を受けたるもの、今新版して世に出つ、論旨明晰、文章通俗にして一讀社會主義の眞相を窺ふに足る。（拾錢）

片山潜著
◉我社會主義

神田同上

本書の内容を知らむと欲するもの試に著者の抱負をきけ。曰く、社會主義は人類主義なり、二十世紀を支配せんとする最大原則なり、本書は著者の信する所、其唱道する所を記せり、故に題して「我社會主義」と云ふ。吾人敢て贊せず（二十五錢）

◉理學界　第一號

神田理學界社

理學界專門の雜誌にして、學理と實驗とに分つて比較的乾燥無味なる理學をして最も興味深く讀ましむるもの記者の苦心想ふべき也、左に面白き實驗の一節を抄記せん

蚤は之を馴らして種々の藝を教へることが出來る。されど之れは非常の巧妙と

忍耐とが必要である。佛國の巴里ではかゝる蚤の見世物があつたといふ事である。其見世物には三十疋の蚤に各木製の小鎗を持たせて隊列運動をなさしめ二疋の蚤に馬具をつけ四輪と一人の御者を有する黄金製の馬車を挽かせ、其乘つて居る御者は蚤であつて木を製いて造つた鞭を以て馬を御するまねをなし、又他の二疋の蚤には砲車を挽かせるなどの樣々の事をしたといふ事である。此見世物につかつた小馬車などは甚だ巧妙に造つてあつて、蚤馬は其脚に固着してある鎖で車に繋がれ、此鎖は一生取り脱する事はなかつた、此等の馴れた蚤は二年半も生きて居て此間一疋も死なゝかつた、若し蚤が大砲又は馬車を輓く時々人の臂の上に置かれて血を吸はせられた、若し蚤が大砲又は馬車を輓く事を背んぜぬときは番人は燃えて居る石炭を取つて彼等に近づけると直ちに仕事に掛つたといふ事である。斯の見世物は今より百年程前に佛國巴里りおん其他の都會で大流行で大喝采を博したといふ事である。此微小奇態の光景の如何にして公衆に見せられたかは諸子の聞かんと欲する處であろう、此れは後方に野外の景色建物等の繪を置いて、其前で蚤に藥を塗ぜしめ、見物人は幕に仕掛けてある凸鏡を通して之を見るのである。云々

報道一束

◎夏の盛りは來り候、されど兎角天候不順にて何となく陰鬱のこゝちいたし候。

夏は勉勵の時にあらずして修養の機に候、到處青山綠水笑を含んで吾等を迎べく。一襲一笠飄然として山水の間に放吟す洵に人生の快事と存候。

◎東京市民は尾崎新市長を迎へて大滿足に候。

◎近時の政界は氣候の變化と共に多少の變局を來し候。即ち伊藤侯爵をはしめ山縣侯、松方伯を樞府に入るゝと共に、内務、文部、農商、遞信の四大臣辭して兒玉總督入りて内務の椅子によるの外、他は悉く兼任と相成候、桂内閣も亦目出度からずや。

◎政友會は伊藤總裁の去ると共に西園寺侯、新總裁と仰き候評判頗る宜しきも政友會の前途を危むもの有之候。進歩黨は今日の時局在野黨合同の必要を認め大に門戸開放主義を取るとの事に候。

◎東京市に於ける街鐵と電鐵の兩社合併問題に就ては、双方の株主合同非合同派の兩者互に火花を散らして運動中に候。

◎東本願寺整理の頓挫として朝日新聞に左の記事掲載せるまゝ轉載可仕候。

大谷派本願寺の財政整理に就て、井上伯が若心慘憺の結果、鴻池銀行より四十萬圓借入の件は同行も承引し、尚信徒総代の連印も出來したるも、役僧間に於ては井上伯の壓迫苛察に堪へず、且つ財務顧問安樂無道氏の無能に呆れ門末にては井上伯以下無信仰者が本山の整理を爲すを不快とし、法主へも頻々上言し、殆ど一人として井上伯に信賴するものなき有樣となれり、而して門派の負債は内所（大谷家）を合せ、大約四百五十萬圓にて、世間に發表されたるものと相違あり、又低利のものは極めて少額にて、約三百萬圓は至急借替を要する高利なり、然るを井上伯は大部分を信徒より徴收せんと企て居るも人氣惡く且重なる世話方は井上伯に敵意を有するより、到底豫定の集金を見るに由なく、年末迄には井上伯の投出を見るならんと云ふ。

◎本會の近角氏は宮城、山形、新潟、長野等の巡廻終りて先頃一寸歸京仕候得共、又々先月廿五日より二日間靜岡の曹洞宗青年會の講習會に臨み、それより加賀、能登越中巡廻の積りに御座候。富山市佛教有志の修養會には多分本月六日頃より臨まれたる筈に候。

◎夏季は最も旅行者の多き時なるべく、旅行者に取りて最も不愉快なるは旅宿の冷淡に候、殊に茶代の多少によりて取扱を異にせらるゝ如きは、不愉快の極みに候。二三年來より茶代廢止の聲有之候も、實行したる旅館は僅少のやうに見受候、是は是非勵行致度ものに候。

◎文部省にてはいよ〳〵國定教科書供給することに定めたる由に候。

◎日露の關係は、いづれまで歩武を進め候や、門外漢の吾々の知る處にあらず候、開戰を唱ふるもの、非開戰を叫ぶもの朝野の間議論頗る沸騰を來し候。旅順會議の甚だ穏かならざる風説を傳ふるものも有之候。何となく雲行急を告ぐるやうに候。

◎今回澤柳氏をはしめ有志相謀り清澤氏奬學資金募集の事は別項廣告欄に相見候通り、永久の紀念に供する由に候。これ適當の方法にしてまた一大美事と存候。

因にいふ、本誌讀者諸君にして右奬學資金に應ぜらるゝ方は、便宜上本會宛にて御送金被下候ても差支無之候

◎過日危篤に陷りたる羅馬法王レオ第十三世は去る廿日遂に遷化せられ候由、其性頗る鋭敏にして其風采は常に人々の畏敬する所の由。法王の職に就きてより二十五年、其間格別の波瀾なくして無事以て今日にいたれりとの事に候。齡正さに九十有三。

◎獄中にありて近角氏の著『信仰之餘瀝』を繙きて、偉大なる感化を蒙り候とて、態々推參したる篤信の人有之候。吾等は其志の殊勝なるに驚き候。

◎動物虐待防止會にては、此頃評議員會をひらき左の二件を議決したる由に候。

一、動物虐待の非行なることを兒童に教ふる爲め倫敦王立動物虐待防止會の例に倣ひ弘く小學兒童より懸賞文を募集すること

一、臨時東京市中の小學校其他の諸學校に於て生徒等に對し講演を開くこと

◎谷中眞宗中學にては兼て巢鴨に校舍建築中なりしが、こたび工事落成したるを以て、九月より移轉すべしとの事に候

◎既報の如く此度本派の前田慧雲師は論文提出して文學博士の學位を授與され候。大乘佛教史論はそれなる由に候。

◎昨年より歐米漫遊中の井上圓了博士は去月廿七日無事歸朝仕候、本月一日より哲學館講習會に於て其土産講話の由。

◎西藏探險者河口氏は、靈魂研究に就て不日獨逸に留學すべしとの事に候

◎東本願寺は鴻池銀行より四十萬圓借入れ候との事に候。

◎本誌先月發行の原稿遺失致候爲め、はがきを以て御託申上候が再び掲げて讀者幷に寄稿者諸君に謝し申候。

拜啓、時下炎暑の候各位益々御清祥の段奉賀候偖本月八日發行の政教時報第百三號の原稿悉皆取纒め印刷所に送付すべき途中使の者誤りて遺失致し其後百方捜索仕候得共遂に發見を得ず候まゝ直に再稿に着手しそれ〳〵發行の準備罷在候處時日漸く遷延次號發行の期日に差し迫り候樣の次第にて乍遺憾此度に限り本月分一回丈休刊の事に相定め申候來月八日には無相違第百三號發刊可仕候不慮の災難とは云ひながら寄稿者幷に讀者諸氏に對して誠に申譯無之候前條の次第不悪御諒察希上候先は右御斷まで如此御座候　拜具

七月廿五日

七、八兩月休講
本郷森川町一、
求道學舍

東北傳道

第一信

待山兄足下

兄よ近時尊候如何、東京を辭せしより既に半ヶ月餘連日寸隙なし今日は海上警戒せられし爲め、一日滯在始めて小閑を得しかど、用向山の如く、今や正さに夜半、漸く筆を採りて別後の消息を傳へむ、今夜は何となく頗る氣も進み勝ちなり、元來當酒田港には今より二十年前予が幼時始めて京都に出でゝ學びし時の同室の友鈴木義應君の生郷也、然るに同君は既に十二年前恰も青年會の第一回の夏期講習會の須磨に開けし時亡くなりぬ、今や偶然にも予は當地に來りぬ、同君の父君は猶鍬鑠たり、弟君も在せり、同君の常々國自慢として語り玉ひし名所は父君の案内によりて見物しぬ、同君と共に撮影せし寫眞を弟君は示し玉ひぬ、嗚呼世は夢なりけり、隣人の來りて何氣なく同父君に向ひて、定めて予を見るにつけて義應樣を思ひ出し玉ふらむと言ひし時は、予が腸は九回しぬ、當院主菊池秀言師も頗る心を配り玉ひしもてなしにて、床の間の掛物を見れば五岳翁の早辭猿鶴追鵾鵬。萬里久爲行脚僧。回憶廿年湖海迹。空山夜雨一青燈。の軸掛かりぬ、眞に今夜の實況なり、感慨の餘、鈴木翁に示して曰く、吾朋今乃亡。來訪謁君翁、夢裡十餘歳、松林吹暮風、と兄よ嗚呼今より二十年後は果して如何、庭前の蛙鳴閑々として夜色轉々寂たり。

回顧せは、去月二十三日夕瀛車に搭して上野を出立せし時は、はや霞を隔てゝ見る心地せり、當時獨り物淋しく北に走りぬ、深く眠に落ちぬ、二十四日拂曉白石に着せし頃、雨を衝きて先生と叫びて入り來り玉ひしは、我か求道學舍の島貫君なりけり、君は一日前に別れて先つ鄕に歸り、兩親兄弟に一謁して直ちに引返して予と共に仙臺に遊ばむとて來り玉ひしなり、十年も遇はざりし朋達に遇ひし心地して俄かに賑かになりぬ、飽まて清らかなる雨後の曉を眺めつゝ車は仙臺につきぬ、三好兄野田兄、道交會の諸君、迎ひ玉ひぬ、共に大泉樓に宿りて久濶を叙しぬ。

二十四日午後は道交會の茶話會に列りぬ、藤村話にて持切なり、夜は三好君宅にて野田、杉谷兩君と共に心を盡したる饗應を受けぬ、信仰談頗る密に入りて、一唱一和、知らぬ間に夜半に達し驚きて辭し歸りぬ。

二十五日は五城舘に於て清澤師の追悼演說會は開かれぬ、猶此席に於て藤村君の死につきて所感を述べて人生問題の研究に資するとの主意なりき、鈴木卓苗君は其主旨を述べ、後藤瑞巖君自分の考を述べ藤村君の親友來りて、澤山の書翰中を示して、同君の平生と人格とを紹介せられたり、聞けば聞く程同君の眞摯なる性質に感ずると共に同君が斷念のあまりに速かなりしこと惜まずむばあらず、予は以爲らく、氏は長き苦悶の暗を破りて將に明星の輝くべき時に近き乍ら、其光を見で去り玉ひし事の悲しさよと、三好君は大に氏に同情を表するの一人なり、世の樣々の批評を批評して氏の考を披瀝されたり、野田法學士も演說し玉ひぬ、曰く、嘗て高等學校に學びし時、單に佛國史の敎授を受けたりし德永先生は、所謂清澤先生なることは昨夜漸く知りし次第なり、かく、十有餘年殆

むど知らざる予か先生を追悼するには、聊か精神上に於て先生の靈を慰むるものあるべしと感する理由ありとて、氏か昨冬已來敎科書事件の爲めに（氏は全く寃罪にして事實明瞭となり第一着に復職されたる人也）、獄中に於て實驗したる人生の眞相と、初めて接觸したる信仰の光明とを披かれたり、語々切々人の胸を衝く、予は清澤師の人格と信念とを仰紹したり、雜誌の社說として送り證けり、此日雨蕭々頗る眞面目なる會なりし、夜中央商業青年會の爲めに坐談を爲す、少數なれど皆襟を正ふす。

二十六日連日の雨晴れ、所謂光風霽月の感あり、島貫君阿刀田君と共に松島に遊ぶ、予松島に遊ぶ正に四回、停車場に着してより、田舍道をたどりつゝ、當年の苦悶を語りつゝ行く、新富山に上り、心を披きて話す、遂に瑞巖寺に達す、山門老杉高くして遠く塵境を絶つ、無相窟畔有緣の觀音の靈像に見ゆ、東海普陀落山に於ける吳道子の作なることはよく知れる所なりしが、何氣なく碑を撫して其背の銘を見るに及びて、始めて此靈像の由來を知れり、承和の初橘大后の命により日本の僧慧夢なるもの五臺山頂に於て之を得て、歸路寧波海上舟動かず、乃ち島上之を祀り、僧其側に庵して止り、香華今に絶へざる者、即普陀落山なりといふ、予は其信念の固くして深く其眞摯至誠なるに撲たれたり、觀月樓上に憩ひ、舟を雇ふて塩釜に渡る、奇巖怪崖松老ひ風清し、此夜百目木君近藤嘉譽子嬢と華燭の典を擧ぐ、君も知る如く、昨秋予の仙臺に遊びし時、婦人會にて予は信仰は家庭唯一の中心なることを辯じぬ、何ぞ知らむ近藤嬢は聽き玉ひしを、遂に之が端緒となりて予が親しき百目木君との結婚は成立せし也、嬢も君も本と、相見たるに非す、予も亦後になりて之を知りし也、眞個に是れ理想的の伉儷、予が此度仙臺に來り、喜びて之に臨みし所以也。

二十七日午前師範學校に於て修養談を爲しぬ、七百の男女學生二時間の演說に一分のゆるみなく、耳を傾けしは如何に求道的態度の眞面目なるかをしるべし、午後縣敎育會にて演說しぬ、題は國民の自覺嘗て所々に於て辯じ、佛國宗敎大會にても辯じたりしもの也、こは予が確信なれば一代の間辯ずるつもり也。呵々、夜曹洞宗中學學生の爲めに偶感二則と題して講話をなしぬ、いつも熱心にきゝとらるゝ爲めに談密に入る。近時曹洞宗敎育頗る活氣あり喜ぶべし。

二十八日早朝濤濶文學士敎育會の爲めに來仙隣室に投ぜらる、獨逸已來の久濶を叙す、朝六時三好野田君を初めとして敎育會道交會の人々百目木君新夫婦を初めとして、近藤家の人々に送られて出發しぬ、阿刀田、島貫の兩君は長町まで同車し玉いぬ、兩君に別れて後は孤身颯然として深く東北の雲に入りぬ、同日午後米澤市に着しぬ、長沼君に迎はれ同地にて演說しぬ、予も連日來疲勞の爲めに頗る衰へしかど力を勉めて信念を鼓舞す、坐中に欠するものあり、予は彼を感化する代りに予は彼が熱心を殺き去れり、深く自ら慚づ、同地は宗敎の信念未だ熟せず、演說後信仰談話會あり、青年求道者の人々集り來る、頗る眞面目なり熱心に求め熱心に說く、

二十九日米澤を辭し、赤の湯に下車し、車を馳せて行く、山光野趣頗るよし、忽ち見る、雨後山紫にして草綠なり實に

描くが如し、一望の曠原地平にして松千樹、犖牛犖々として牧童に伴ひ、風物悉く是太古の俗也、車夫に問ふ、答て曰く是昔、義家が兵を觀し所、陣之峰原といふ、乃ち、車を下りて低徊微吟去るに忍びざりしものありき、長井町に向ふ、井上豐忠氏は遠くまで迎へ玉ひぬ、回顧せば改革事件已後の再會、最も驚くべきは同氏が非常に信念を鑄ひ上げ玉ひし事也、活力あり、觴々人を動かす、氏唱へ、我應ず、談、信仰の經驗と清澤師の追懷を出でず、一語も宗政俗務に及ばす、同日午後同氏の本堂に於て、予が信仰の實驗を披瀝しぬ、自らも感じ、人も感ず。

三十日曉來裁縫學生を初めとして女子の爲めに信仰を說く、午後議事堂に於て演說す、當地方の文字ある者、教育ある者、皆大によく聽きて吳れたり、此日は予は終日靈感を以て包まれたり、演說前、井上君予を導きて同地に於ける古刹容日阿闍梨の舊蹟金剛山遍照寺に伴ふ、同地の醫大木周益翁なる人の手書にかゝる一筆大般若六百卷を示す、母の菩提の爲めに明治二十八年七月一日より三十三年五月二十五日までに書き畢れり、奥書を見るに一日に一卷を書す、文字頗る頓筆也、予深く其志に感ず、演說後同氏來り訪はる、予紀念の爲めに同氏手書の心經を請ふ、氏快諾、大本親書の餘白を用ゐて書寫して贈らる、予に需むるに般若心經の四字を頭字にしたる詩を書せむことを請ふ、文字頗る用ゐ難かりしを以て翁の名周益の二字を加へ、古詩の眞似をなして贈る曰く、般若六百是文殊。若老同唱唵那謨。心月靜觀利劍冷。經典親寫氏生蘇。周到如翁眞眞祐。益物靈現仰巍乎。と席にある常樂院住職五十公野隆諦師謂て曰く、予か寺に龜岡文殊を安ずとのち師に伴ひて詣す、寺は容田師の隱れし處、五十公野師予を導き茶をすゝめ、慈雲律師の筆になる十善法語の跋人になる道の親寫を示さる、文字蒼古にして遒勁、而も脫俗高懷頗る風韻に富む、由來頗る正し、予何氣なく是れ雲照律師に適する品也といふ、師忽ち然らば律師に贈らむといふ、予は師が何の惜氣もなく、かゝる奇代の品を他に贈らるゝ禁度に感ず、此夜井上君毎月一回催す信仰の談話會にて十數人の爲めに話すことを請はる、時刻に及び集る者百八十人町中の青年皆來る、井上君驚きて曰、未だ嘗て見ざる所なり、即ち胸臆を傾けて語る、私かに以爲らく冥々の間井上君が當地方を感化すること偉大なりと、此夜夜を徹して眞宗大學生試驗成績を調へ、殘燈影裡、井上君と共に朝餉を受け別を惜みて去る。

爾來山形五日間の講習會、尾花澤新庄の傳道、酒田三日間の講話、語るべき事多くして書く隙なし、現に此書は一昨夜酒田にて筆を採り、昨日船中屢々筆をとれど苦しくして止め昨夜此荒驛に宿り、今朝新發田青年會に行き久しぶりにて廣田兄草間兄に遇はんとて樂みつゝ、大忙ぎにて筆を止めぬ、昨日荒川と云へる所にて上陸せしが、一望の平沙也、渡守の茅屋に憩ひ、荷持を雇ひて十八町青松の間を步して漸くにして之家に達す、邊鄙の群類を化するも、師敎の恩致也と言はれし昔を忍ひつゝ、昨夜佛恩を喜びつゝ獨り穩かなる夢を結びぬ。

越後築地驛にて　近角旭村

七月十一日の朝

清澤滿之君奬學資金募集

物質的文明の潮流激甚なる間に於て敢て身を宗教界に投して國民の精神的感化に從事せられたるもの吾輩故清澤滿之君に於てこれを見る君が明治二十年文科大學を卒業せられてより宗教界に貢獻せられたる所の少からざるは更に多言を要せず若し向後なほ數年の間君か英邁非凡の資と多年修養の功とを以て世の青年を指導せられたらんには能く物質的偏傾の弊を矯むることを得たらん然るに君か學德益々老熟の境に進みて君の感化愈々大ならんとするの際忽然として逝かれたるは啻に君の爲に哀むのみならす亦實に我社會の爲に遺憾とする所なり乃ち茲に清澤奬學資金を募集し之を分て東京帝國大學と眞宗大學とに寄附し今後宗教學を專攻せんとする學生の學資に充て以て聊か君か永久の紀念に供せんとす謹みて同感諸君の贊同を希望す

御出金及其御申込は東京小石川區表町澤柳政太郎東京巢鴨眞宗大學南條文雄の內一名にあて便宜御送付下されたく郵便爲替は小石川郵便電信局拂に願ひ候御申込期限は本年中と致候

明治三十六年七月

發起人

一木喜德郎　今川賢神　稻葉昌丸
早川千吉郎　近角常觀　岡田良平
大草惠實　和田圓什　吉由賢龍
南條文雄　村上專精　上田萬年
梅原讓　澤柳政太郎

便宜上木會宛御送金被下候へは取次可致候

本郷森川町一　大日本佛教徒同盟會

一創業六周年、教界唯一の日刊新聞

中外日報

紙郵代共　一ヶ月三十二錢
税　半ヶ年一圓九十錢
　　一ヶ年三圓六十錢

一率直に公平に主として東西本願寺を中心として內外宗教界の時事を報道論評す

京都東三本木丸太町上

中外日報社

東京市芝區高輪佛教大學々友會發行

高輪學報 第二十號

毎月一回一冊金十錢　半年五十五錢一年一圓　六月五日發行

要目

佛教史一片　前田慧雲
佛教倫理の梗概　楠原龍誓
佛教に於ける萬有教體論　日下大痴
詞林
怪洞探險紀行　松原至文
胡笳　うつせみ
蒐錄
死とは何そや　千々岩誓道
婆羅門教と印度教　佐竹撲堂
講話
支那開教策に就て　大内青巒
彙報
數件

附錄英文大無量壽經
和譯　藤井芳信

●家庭社同人編著　七月一日發行此讀物は家庭第三卷第七號であれば別項家庭の廣告に依て一年又は半年分送金する方得策なり

夏の讀物

なごゝろ

極めて廉價なれば夏の施本贈物等に最も適當なる良册子にしてきた布教家の好材料たることを期す

定價　一部前金八錢　十部已上七錢宛郵税不要但し郵券代用は五厘切手に限る

目次

●其善き者を擇べ……南條文雄
木の葉の下を通る小川でも、集れば大海となる、天下を驚かす偉なる偉人でも、家庭に於て、小善を撰んで行ふのが其始まりである、博士此理を喝すこと甚だ親切である、

●因果應報……岫德龍
紳士淑女となるのも、毒婦強盜となるのも、皆平素行狀の因から出て來る果報である、確かに紳士淑女となるの道を知らうと思ふ人は之を讀め、

●信仰の味ひ……伊藤證信
胸の中の苦みを去て、勇み進んで快よく人生の務めを果すには、大磐石の樣な確かな信仰がいる、本篇は信仰問題の中堅を突いて縱横に說き盡して遺憾なし、

●短夜物語……山田夢白
材料は眞宗寺院の家庭に取り、宗教的婦人の模範を畫さたる一場の物語、現今の宗教界を救はんとする賢婦人が、未來の大宗教家を養ふ有樣の如何に心地よきかを見よ、

佛教主義婦人雜誌

家庭

毎月一回五日發行
價　一部前金八錢　半年四十二錢　一年八十錢　郵税共

本誌は本願寺家事講話讀苑詞藻報導等に分ち、裁縫料理育兒衛生禮式等は各專門家の筆に成り、名師の宗教講話を載せ、毎號御伽噺の懸賞募集あり、特に信仰の鼓吹には最も力を盡す

申込所　東京巢鴨　貳千貳百五十五番地　家庭社

文學博士松本文三郎著

印度雜事

上下二篇　全一册　定價金九十錢

上篇史的印度は廣義に於ける印度文學史にして印度研究者政事文學科學宗教哲學社會美術建築工藝現時の狀態の九篇を收め嶄新の研究により印度に於ける古今變遷の迹を叙し明晰的確一言苟くもせず此等複雜なる印度諸顯象も瞭然掌を指すに似たり。

下篇印度雜話は現時印度に於ける風俗慣習宗教美術に關する一切の珍話奇聞約八十則を紹介す

此類の書我邦未た曾て有らさる所なり。

發行所　東京日本橋區本石町二丁目　六盟館

規定

一、本誌は毎月一回(八日)發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

明治三十六年八月七日印刷
明治三十六年八月八日發行

發行兼編輯人　百目木智璉
印刷人　白土幸力
東京市本郷森川町一番地
發行所　大日本佛教徒同盟會出版部
(電話下谷二四三二)

大賣捌所　東京市神田神保町　東京堂
同　本郷四丁目　文明堂

持心如大地。亦如水火風。
無二無分別。究竟如虛空。

政教時報第百參號
明治三十一年十二月廿六日遞信省第三種郵便物認可
明治三十六年八月八日發行　（毎月一回八日發行）
（東京市神田區美土代町二丁目三光堂製版印刷）